

学園最強の独隠楽生(リタイアライフ)

如月十夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、子供たちは天からの贈り物（ギフト）を持って生まれてきた。東雲 楽はそのうちの一人（？）であり、今までにない”禁忌（SSS）”級のギフトを有していた。

楽にとってギフトは、神の力でありつつも悪魔の力でもあると考え、過去に囚われながらもギフト保有者限定の学園に通うことになった。学園でのルールは ” 殺し合い禁止 ” ただそれだけである。卒業後に安定した生活をしたければ、学園で ” 全体成績 ” 上位7人に入らなければいけない。

ボツチで面倒くさがりな楽は、この学園で上位を得ることが出来るのか？

【最後に俺が楽をできれば、それでいいんだ】

書籍化！って言うまで頑張ります。

表紙絵募集中Twitter@kisa_toyasirou

カクヨムで読みたい方はこちら▶<https://kakuyomu.jp/works/117735405488804618>

目次

零章 独隠楽生の芽生え

警告

期待と失望は紙一重

目《眼》を見ること

三種ギフト保持者《マルチホルダー》

天然(?)少女の危機と不明ギフト

学園最強のギフト保持者《ホルダー》 前編

学園最強のギフト保持者《ホルダー》 後編

独りは破られる(?)二人の約束《契約》

A f t e r V i e w 東雲楽の怒りと迷い

A n o t h e r V i e w 藤宮涼葉は約束する SS

一章 嘘と真実

変化した朝と特別授業

特別授業は嘘の香り

準備期間① 契約開始

準備期間② 天然少女の危機、再び

1 6 12 16 24 28 37 44 53 57 60 64 67 72

零章 独隠楽生の芽生え

警告

2045年恩恵ギフトを持った子供チルドレンたちは突然産まれた。

それは、神から貰った能力ちから

それは、悪魔から押し付けられた能力ちから

それは、人に埋め込まれた能力ちから

真実を知っている人、真実に辿り着いた人は多くない。ましてや、知ったとしてもそれを伝えようとする人はこの世には一人も居なかったのだ。

いや、伝えられなかったのかもしれない。例えば…教えようとする、真実の本質を知っている人達が消しに来る…とかな。

世間的に言えば、神からの恩恵を貰った子供達として拡散された訳だが…それは、人として見られているのか？もしも予想もしないタイミングで、必要無いタイミングで、見られてはいけないタイミングで能力が発動すれば…普通の、一般的な人たちはどの様な反応を見せるのだろうか？

異色の目で見られ、恐怖し、その場から逃げ出す人が殆どだろう。化け物だと罵り、危害を加えるといった事件も少なくはない。集団心理の第一人者になる事が正義であると勘違いをしたのだ。

この者達は決まってこう言った。

「皆がやっているから」

「化け物だから仕方が無い」

「力を公共の場で使う事が悪い」

共通している事は、他責している事だ。

このような事案への対処として政府は能力所有者…別名、恩恵ギフト保持者ホルダーを保護することを決定し、ギフト保持者専用の都市学園を建設した。

全ての権利を政府が持つており、この学園を選ばないギフト保持者は誰一人いなかった。

そして、学園都市が出来てから十年後……今年もギフト保持者が過去一番多く入学していた。その中の一人として東雲樂しのめらくも、この学園に新入生として入学していた。

―入学式前日―

学園の規則として、東京湾から少し離れた位置ある学園都市へ入学前日に入り、学生寮に荷物を置かなくてはいけないのである。以降は卒業するまでに都市外へ外出することが出来ない。

「置くものと言えば本だけか……手間がかかる物を持って来なくて正解だったな」

生活に必要な家具は一式用意されている為、生徒が持ってくるような物は多して多く無い……と思う。

「本も置いたし、やる事が無くなったな」

話題にする程の事ではないが、よく言われる趣味という趣味が自分には無いのだ。何も無い時は本を読んでいるが、これは趣味では無く、ギフト使用にとつての必要手順である。

「今日の残りは本を読んで過ごすか」

ゆつくりと本棚へ向かい、本を取り出した所で部屋のチャイムが鳴った。

「……俺の部屋に来るような人は居ないはずだ。あるとすれば、俺が部屋を間違えた……もしくは隣人としての挨拶、と言ったところか」

隣人としての挨拶の可能性が高いと予想してドアを開けた。そして、目の前に現れた人物は隣人などではない。

「……学園長、何の用ですか？」

「東雲樂……久しぶりに会ったんだ、用から聞くななんて野蛮じゃないか？」

学園のパンフレットに書いてある女性。この都市学園の総責任者兼、天鳳学園の学園長である鴉山一葉がドアの前に居るのだ。

「そこまで親しく無いと判断したので」

「親しくない……か。まあ、間違いではないか」

学園長はふつと小さく笑った。

「それで、要件を話してくれませんか？」

「今、ここで話せるような内容では無い。私の部屋まで来てもらう、どうせ暇をしていたのだろうか？」

確かに暇をしているのは事実だが、行った所で変な事に巻き込まれる気がする。出来れば部屋で穏便に済ましたい所だ。

「この部屋では駄目ですか？」

「女性を部屋に連れ込む姿を他の生徒に見られたらどうするんだ？」

面倒臭い。この時間を早く終わらせるには、行くしか無いか。

「……はあ、行きますよ」

「それじゃあ、移動するぞ」

すると、いきなり目の前の景色がぐにやりと歪んだ。使った事は無かったが、これが空間転移か……気持ち悪い。感覚的には酔ったの類に入る気持ちの悪さだった。

「すまない、先に言っておくべきだったな」

「本当……お願ひしますよ」

気づかれぬ程度にギフトを使い、この感覚を適応させる。コントロール身体操作というギフトの応用で体内の異変をコントロールし、空間転移の際に起こる酔いに慣らしたのだ。

「……ふう」

「もう大丈夫か？」

「ええ」

学園長は高級な自分の椅子に座り、俺にソファへ座るように促した。

「さて、用件を言うのだが……東雲楽」

「はい」

「もう分かっているのだから？」

鎌を掛けているのか、それとも理解している事に確信しているのか……後者だな。

「……恐らく」

「その返事は分かっていると解釈して話を進めさせてもらう。東雲楽、私の許可無しにS級以上のギフト使用を禁止する」

「……………」

ギフトにはランクが振られており、C〜S級の幅でギフトの危険度が変わってくると教えられた。だが実際には違う……………S級の上があることを俺と学園長は知っている。

「緊急時は？」

「基本的な判断は任せるが、明らかな攻撃の姿勢での使用は罰を与える。異論は？」

「ありません」

一旦の静寂が訪れる。話が終わったのではなく、話を続けるべきか悩んでいる、俺ではなく学園長が…だ。

最初に学園長の思考を読んだ際に内容は理解しているので、さっさと話してほしい。というか、言わせればいいか。

「話は終わりですか、帰ります」

立ち上がってドアへと向かう振りをする。

「ま、待ってくれ。もう一つ……………もう一つ話がある」

「何ですか」

椅子へと戻り、学園長の話を再び待つ。

「明日の入学式は君たちを煽る祝辞を述べる、君の力を使って新入生全員を同調させてくれないか？」

「面倒です」

「……………そうか」

同調……………不安を煽って緊急性を高めたのだろうか、わざわざその為だけにギフトを使う……………俺にとってメリットが無い。

「もし、俺だけ特別枠にしてくれたら……………考えなくもないですよ」

学園長は少し驚いた様子で俺を見たが、理解したのか少し冷静になり考え始めた。

俺は下衆く笑い、交換条件を掲げた。この条件は拒否されるだろうが……………必要最低の条件さえ貰えればそれでいい。

「手助けをする……………それを条件に出来ないか？」

「良いですよ」

「……………ふう、助かる」

必要最低限。交渉の天秤を傾けるには、強欲の裏に実利を乗せればいい。

「それにしても、明日の事について私の思考を読んだのか？」

「ええ」

「私の思考は読みやすかったのか？」

この人は表は堅いが、思考も堅い……ということでは無かった。ただし、学園長が言っている思考は深層思考に置いてあったのだ。これは意識して置かなければ実行出来ない技である……力量を測るためにやったのだろう。

「どうでしょう」

用事がこれ以上無いことは確認済みだ。俺は立ち上がりドアへと向かった。

「東雲楽、お前のギフトはどのランクに位置すると考える？」

「……SS級ですか？」

「……これは私の考えだが、そのギフトはSSS級に位置すると思う」

SSS級か……悪くない。

「買い被りすぎです」

「それでも無いぞ。一つ言っておくが、評価もしているのも事実だ。

しかしその反面、危険視している部分もある事を理解して欲しい」

「……」

知っている人は全員、俺を危険視する事ぐらい理解している。今更そんな事を言われても返す言葉が出ない。

もう、慣れてしまった。

「失礼します」

ドアを開けて出ようとした時、学園長が一言だけ言った。

「今年は……異常者が多い。気を付けてくれ」

会釈だけして学園長の部屋を後にした。

期待と失望は紙一重

—入学式当日—

期待と希望に胸を膨らませながら生徒達が寮から続々と登校していく。大抵の生徒は昨日の内に隣人と仲良くなり、仲良く登校をしている中…一人だけ本を読みながら登校している生徒が居た。

俺……か。

周りからすれば「寂しそう」「可哀想」といった目で見られるのだろうが、生憎その感情が分からない……と言うと「我慢しているんだね」「負け惜しみ?」のように返ってくる。更にその感情が分からない俺は…どう返せば良いのだろうか?

などと持論を脳内で再生させながら登校する。

本はただのおまけでしかない。しかし……

「はあ…五月蠅い」

浮かれる気持ちは理解出来るが、本に集中できないほどに五月蠅い。そこで初めて、俺の思考が興奮している事に気が付いた。

「…俺も、入学というイベントに浮かれているのかもしれない」

身体操作コントロールを使用し、聴覚の一部を視覚へと回して、本へと集中できるように設定した。最低限の感覚さえあれば問題は怒らないだろう。すると、背中が何かに当たった…いや、人が当たってきた。

「っー」

「あっー!」

後からぶつかつた事で姿勢が前傾になってしまった。すぐさま身体操作コントロールを使用して右足を前に出し、何とか踏み止まることに成功した。

「危ないな」

「ご、ごめんなさい。大丈夫でしたか!」

当たったのは新入生の女子か。俺はこれ以上関わられないようにすべく、不機嫌そうに軽く俯く。だが、彼女はそんな事も気に止めず上目遣いで心配してきた。

観念して俯く事を止め、彼女の方を向く…そして俺は啞然としてし

まった。

「なぜならそこには、”今はもう居ない”妹である優梨の顔があったからだ。」

「優梨!？」

「え?。」

「あ、いや、すまない…人違いだ。こちらこそ不注意で、すまなかった」
「?…前をすっかり見てなかった私が悪かったです。ごめんなさい。では、また学校で会えたら…」

「……はい」

そう言い、彼女は一緒に居た女子と歩き出した。しかし、同学年に居るはずのない妹が居るわけないだろう。考えればすぐに分かることを……。

優梨と叫んでしまったせいで、周りが俺に注目してしまった。一番嫌いな状況になってしまったか。

すぐさま真顔に戻し再び歩き始める。注目もすぐに外れて、警戒も解けている。それからは遅刻することも無く、学校の講堂へと到着した。

—講堂—

「席は自由か」

クラス開示は入学式が終わってから、との事らしい。前方の席や自分の前に来た人の席へ詰めると、会話をする可能性があるな。

なるべく後方の席を取って座った。案の定、前方の席から埋まり丁度俺の席へと埋まる頃には、殆どの新入生徒が入っていた。

「横に座ってもよろしいですか?。」

「え、ええ」

ゾクッ

俺が隣に来た女子生徒の顔を確認しようとして顔を上げると、背筋に悪寒が走った。

ギフトの警戒域を最大まで上げ、目の前の女子生徒に意識を集中させる……学園長の言っていた異常とは、この子も入っているのだろう

か？

「あまり警戒なさらないで下さい、うつかりと殺してしまいます」

「それは物騒な話だな。この場で、そんなに目立つ行動をする度胸があるのか？」

「私は貴方に興味があるんですよ…東雲楽」

俺の名前を知っているのか…調べようとするれば、どのルートからでも情報収集は可能なのだが、こいつの言っている話は、公開されている情報程浅くない。もっと深い…俺の本質に近い話をしたがっている…いや、しようとしているのか。

「私だけ貴方の名前を知っているのは不公平ですか、私も名前ぐらいは開示しましょう。私の名前は深町一花、貴方を求めてここに来たと言っても過言ではないです」

「深町…一花」

聞いたことのない名前だ。名前を聞けば何かしら記憶が呼び起こされるかと思っただが、すれ違った程度の記憶すらも起きないという事は、深町一花が勝手に俺の存在を意識していた、という事か。

「それで？俺に興味があるから、何がしたいんだ？」

「貴方のギフトを見せて欲しいのです」

「今？」

「今です」

俺のギフトで学内公開するとなれば…コントロール身体操作か。

「一つだけだ」

「二つ見せて欲しいです」

「俺の意思が拒否した。無理強いしようとするならば、学園の規則に反するぞ」

ギフトは一人に対し基本は二つの恩恵…能力を与えられる。一つしか保有していないという前例は存在していない。逆に、三つ保有しているという前例は存在していた

これによって、一つは公にしても問題無い能力を…もう一つを緊急時等に使用する為、他人に見せる人は居ないだろう。学園のルールとしても決められている。

「…それは残念です」

「もういいか？」

立ち上がった席を移動しようとする、袖を引かれて無理矢理座らされる。

「何をする！」

「もう始まりますよ、このままの席でいいじゃないですか」

「本人に対して殺すと言っておいて、そのまま隣に座る馬鹿が居るか？」

深町からは確かに殺気を感じた。これだけの事をしておいて、式典中に何もしないという確信が無い。

俺は一つだけ隣に移動して一席分の空間を作った。

「そこまで警戒しなくても貴方なら、私が攻撃するより前に殺せますよね？」

返事はしない、この間に一席分の空間内を完全に把握した。これにより、深町が空間内に入れば一瞬で切り刻むことが可能だ。

「後には行かない…だが、俺の横には来るなよ？返り討ちには会いたくないだろう？」

「そうですね。貴方は私のギフト内容を知らない」

「どういう事だ？」

「私も貴方も、手の内を知らない」

「…その言葉で信用出来るほど、人生短くないぞ」

「人生じゃないですよ…人じゃない」

最後に放ったその一言は俺にとって、相手を信用する言葉そのものだった。

俺は深町一花の隣に座り直し、入学式が始まる時間まで何も話す事もなく過ごした。

—十数分後—

時間が遅れることも無く、入学式が始まった。

最初に登壇したのは学園長だ。

「ギフト保持者ホルダーの皆様、ご入学おめでとうございます」

学園長は、そんな言葉から語り始める。目の前で聞いていると、威圧感があつて勝手に体に入つてしまふ生徒が多い様だ。だが、遠くから見ると、安らぎを与えるような話し方をし、皆の緊張を解していった。

作つてるな…こんな話し方は、完全に上辺だけの顔と言えるだろう。まあ、入学式であんな口調をしたら、入学式で学園長の印象が悪くなつてしまうからな。

学園長がペラペラと定型文で祝辞を述べてる中、そんな思考をすする。ここにいる全員が、学園長に対して尊敬の目で見ているだろう。

だが、俺は違う…学園長の次に発する言葉を”読んだ”のだ。恐らく、これからの話は悲鳴を呼ぶのかもしれない。そこまでは予・知・すればいいのかもしれないが、そこまではするのは些か面倒というものだ。

「さて、祝辞はこのぐらいにして…この学園のルールを私の口から述べさせていただくよう」

声色が変わつた。そのままの口調で説明すると予想していたが、昨日話した時と同じ口調に変わった。

その瞬間、新入生が騒ぎだめきはじめる…それもそうだろう。今まで笑顔だった学園長の顔が、急に険しい面持ちに変わったからだ。どんな話が来るのか分からない新入生たちは、すぐに静かになり耳を傾ける。

「この学園では、総・合・成・績・上・位・者・七・名・を将来安定の生活を送れることを約束しよう」

「!？」

新入生達は疑うように驚いた。七名という狭い門をくぐらなければいけない、という現実を今突きつけられたからだ。こんな話はパンフレットや、学園のサイトには一切書いていなかった。

「驚くのは分かるが、今は静まれ」

さらに脅すような言葉を突きつけ、新入生達は静かになる。

「これは、君たちの先輩達もやった事だ。当然ながら君たちもこのルールに従わなければいけない」

さらに続き

「君たちには、ギフトがあるのだろうか？その力を有効的に使い、上位に立てばいいじゃないか」

「ここまで言われると、さらに現実味を帯び、耳を塞ぐ者までいた。君たちの疑問は分かる。7名以外はどうか？だろ？答えはこうだ。見放される：が正式な答えだろう」

この体育館のような広い場所で、何人かの悲鳴は濃く響いた。見放されることが、どんなに恐ろしいかという点、ギフト持ちが社会に出ると思まわしい存在として扱われ、普通の生活を送ることは不可能とまで言われるだろう。

「このルールの変更要請は、一切受け付けない。それ以外の質問なら：善処はしよう」

「無茶苦茶だ」

どこからか、そんな言葉が聞こえてくる。

「最後に、禁止事項だ。簡潔に話そうか：殺し合いのみ禁止だ。」

つまり、それ以外は何をしても構わない。私からは以上だ。」

タイミングを見計らい、学園長との約束をしっかりと果たす。耳を塞いだとしても無駄だ：心の中に響かせる事で混乱を、より掻き立てる。

効果としては、悲鳴ではない。みんなの頭には只只疑問しか残っていなかった。そんな事を気にも止めず、学園長は降壇していく。

昨日、この学園都市に來た時点で全員が察するべきだった。なぜ、この学園は本州から離れた所に設立されたのか、これは明らかに学園都市から出ることを禁ずるルールを成立させる他にも、本州への連絡を断つためだったと……

それを気づけたのは、俺だけだったようだ。

目《眼》を見ること

入学式は無事(?) 終わり、クラス開示後に新入生はクラスへと移動した。

周りの生徒達に気が無く、泣いている者もいた。ただ、その中でも平気な顔をしている者がチラホラ見える。最初から何かしら起きるのであろうと想定していた…本当にそうなら、会って話しをしてみたいな。

思っても行動にする気もない事を考えながら教室へ向かった。

— 教室 —

俺は教室に着くなり窓側の一番後ろ…よく言われる言い方をすれば、主人公席へと座った。前には六つの席があり、よくよく考えれば俺の頭文字はしだから、アゝサまで六人しかいないのかこのクラス…。

本を取り出し、軽く流し読みをしながら周りの会話に耳を傾ける。

話す内容としては、やはり学園長が離れた話が主題となっていた…しかし、その中でも少しだけ面白い話をしているグループがあるな。

コントロール 身体操作を使い、聴覚に神経を集中させた。

「全員が保証を持って卒業出来る、って言う選択肢は無いのかな？」

「分からないよね…涼葉は出来ると思う？」

「争いは嫌いだから、全員を出来るように向きたいけど…出来ることはしたい…かな」

希望を捨てない…そんな感じか。面白みは無いが、一応マークはして動向を見ておこう。それで、どんな奴らが言ってるんだ？

顔を上げて、話しているグループを軽く見た…その三人の内二人は分からないが、一人は見た事がある…というか今朝、後からぶつかわれた。

「ややこしい事に巻き込まれる気がするな」

何故なのかは分かっている、ぶつかって謝られた時に見た眼が、まさにややこしい事の塊だった。

「魔眼…しかも、中身がJUSTICE正義か」

利用価値が無いこともないが、周りに居るだけでトラブルに巻き込まれるような体質になってしまう。というか、彼女自身がトラブルメイカーとやらだ。

このクラスのリーダーとなる存在は、彼女になる…か。かなり厄介だな、無理やり友達の輪に入れるような…そんな人柄だ。更に、容姿もそこらに居るような人ではなく、クラス内でも一番上に君臨する程の綺麗さがあった。

一人で居たい俺にとっては、毒のような存在になるな。早めに対処しておく方が良いだろうな。

彼女の方を暫く見ていると…彼女と眼が合った。これは、運命の出会いではなく…必然な出会いだということを、俺は読めるはずが無かった。

俺の存在に気付き、直ぐに近付いて来た。今ほど帰りたと思った時があっただろうか？

「あの…今朝の、ぶつかってしまった方ですよ？」

「……ああ」

開口一番そんな事を言い出す。

しつかりと彼女の方を向くと…やはり目ではなく眼があった。これは、軽くあしらって今後も接触しないという選択肢が正解だな。

「やっぱり…今朝は本当にすみませんでした」

「不注意は誰だつてある。周りに気を付けて登校してくれ」

「気をつけますね！……私は藤宮涼葉ふじのみやすずはと言います。一緒のクラスになった事だし、これから仲良くしてください」

これから…仲良く…ねえ。俺の頭の中では。仲良くするという選択肢はこれっぽっちも残っていないかった。勿論、こいつだけではなく他のクラスメイトも同様だ。

「悪いが、俺は誰とも仲良くするつもりは無い」

「えっ？」

「学園長の話をしつかりと聞かなかったのか？上位7位だ。クラス単

位で条件にしたなら仲良くしたのかもしれないが、この中でも競走し
なければいけない。この意味が分かるか？」

「で、でもっ！学園長が嘘をついてるって可能性も…」

「無いな」

ピシヤリと言い切る。

藤宮の眼は俺を掴むように捉えている中、藤宮の眼に異変が起こつ
た：魔法陣か？ふむ、ギフト使用中と言ったところだな。

JUSTICE正義なら……。

「俺が考えている事が本当だと分かったか？」

「なっなんで!？」

「使うなら眼を隠せ。戦いの最中だとバレやすいぞ」

藤宮は無言で俺を見る：ギフトは使用していない。

「用がないなら戻ってくれ、お前のせいで周りに注目されるのは嫌だ
からな」

「あんたっ！涼葉が仲良くしよって言うてるのに、何様!？」

さっきまで一緒にいた藤宮の友達とやらも近付いて、俺に対して怒
りを表していた。

「逆に聞くが、お前らは何様だ？ただのギフト保持者だろう？」

「あんたもそうじゃない！」

「そうだ：な」

視線を本に落とす。こんな事で俺の時間を奪って欲しくはない、本
を読んでいた方が有意義だ。早めに終わらせるに尽きるな：だが藤
宮は、まだ俺を眼で見ている。

少しして、何か納得したような様子で微笑んでこう言った。

「私は貴方と友達になる事を諦めませんよ、貴方がいれば全員が保証
を持って卒業出来る気がしてきました」

「そうか、それじゃ精々頑張ってくれ」

手をひらひらとして、ここから離れるように促す。

藤宮は元の場所へ戻って行く：注目は暫く外れる事は無かったが、

先生が来たことにより次第に外れていった。

「JUSTICE正義は、人のギフトを読み取る事も可能……か」

小声でそう言い、本に集中し直す。

恐らく大丈夫だろう、俺のギフトが読まれることは無い……。俺のギフトはCランクに設定しているからだ。

「しかし、まあ……」

一人で過ごし、かつ楽をするには、もう少し”保険”をかけておく必要があるそうだ。

三種ギフト保持者《マルチホルダー》

先生が教室に入るとすぐにS H Rショートホームルームが始まった。

「初めまして、この三組を担当することになった浮島日和うきしまひよりです。よろしくね〜！」

学園長とは異なり、誰にでも優しく出来るふんわりとした雰囲気を持つ女性だった。

「一先ず出席を取るから、名前を呼ばれたら返事をしてね」

浮島先生は順番に名前を挙げていき、俺の名前を呼ぶ前に名簿を見て止まった。

「次は〜ふむ……ほお〜」

「どうしたんですか？」

不思議に思ったクラスメイトが浮島先生に聞く。

俺の番に回り、先生は興味深そうに目を細めて俺の方をじつと見る。先生が手に持っている紙に、俺の事が書かれた不完全不完全をな資料があるのだろう。もしくは……本当の事を書いてある資料があるのか。どちらにしたって俺のすることは変わらない。第三者に知られたらば、直ぐに殺す……それだけだ。

「いえ、何でもないですよ。東雲楽君」

「はい」

「次は……芹沢奏さん〜」せりざわかなで

何事もなかったように返事をする。先生も俺の考えを察したのか、流れを止めずに次々と生徒を呼んでいった。

「最後に〜八黒若葉さん……で最後だね」やぐろわかば

最後まで言い終わり、浮島先生は教室全体を見渡してある言葉を口にする。

「総合成績上位七人」

クラスメイト達は何かを察したのか、神妙な面持ちになる。

「これに嘘はないし、ルール変更はないの。学園長が言った事は全て決定事項だからね」

改めて突きつけられた言葉だ。ここでの反応は四つに分かれた。現実から目を背ける、上位を目指す為闘志を燃やす、全てを面倒に思う……今のは俺しかいないか。最後に……未だに全員が助かる可能性を捨て切れていない……藤宮だ。

「でも、心配しないで、私はこのクラス全員を平等に育てる。上位七人に入る可能性がある人が居ても、その人だけ特別扱いすることはない。と思ってもらえると嬉しいかな」

この言葉に救われる者は少なからずいるだろう。ただ、俺にとってその言葉は不愉快という部類に入る言葉だった。出来れば俺は、クラスに居ないものとして扱ってほしい。さすがにこじれすぎている思考だろうか？一度この思考を捨て、再び先生の言葉に耳を傾ける。

「これから、成績上位になるために必要な事を話すね。成績上位になるには、当たり前だけどポイントを貯めなければいけません。ポイントを増やすために必要な要素の一つは、クラスポイント。これはテストの点や、その他の特別な授業で追加されます」

特別な授業……肝となるのはこれか、言葉からして嫌な雰囲気があるな。

「二つ目は、この学園における、問題の解決者。この内容については、後日話させてもらうね。最後に、ギフトによる実技特別試験の高成績者のみ与えられるポイント。これは言っている通りの内容で、実技の授業を十回受講後に必ず、実技特別試験というものがあります。ここで、上位高成績を収めた十人がポイントを貰えるというシステムだよ」

クラスメイトは皆、真剣にポイントの話に耳を傾けていた。先生の話は、要するに殆どのポイントは学校における授業が関係してくるという事だ。その中で特殊に入るのが、二つ目にある問題の解決……といったところだろう。

「何か質問はありますか？」

「はい……」

藤宮が勢い良く手を挙げる。

「上位七人との事ですが、ポイント数が重なってしまった場合、八人目

の優遇が可能となるのですか？」

「それは有り得ないかな」

「それはなぜですか？」

「君たちから見て先輩方の資料を見て見ると、去年含めて十年間で同ポイントになった前例は一度もありません。又、同ポイントになった場合には、実技特別試験の試合形式で優遇者を決める、という事になっていきます」

「……そうですか」

藤宮は落胆して席に座る。この返答で、先程藤宮が話した内容は九割九分否定されたと言えるだろう。

俺の視線は藤宮に向けていたが、藤宮はその視線気づき残念そうな顔でこちらを見る。一番後ろという点では同じ位置なのだが、俺と藤宮の間には3列も挟んでいる故、噛みつかれるなんてことはあるまい。これで確実に、俺に構う事は無いと判断して視線を本に戻した。

「説明は以上ね、あと最後に東雲君」

「はい」

いきなり呼ばれたため少し驚いたが、表面上ではそのように気づかれることもなく返事をした。

「後で、私と一緒に学園長室に行こうか」

「「はい？」」

「はあ…」

楽に過ごさせてくれないのがこの学園であり、このギフトという能力なんだと…しみじみと感じさせるな。

その後SHRは終了し、俺と浮島先生は学園長室に足を向けていた。

「それで、学園長は俺にどんな話をするとか詳細は聞いていないですか？」

「聞いてないかな、SHRをする前に小声で東雲君を学園長室に来させるように、って言われただけだから」

「はあ…なるほど」

くそう、学園長が呼んでいるとクラスメイトの前で言われたら良からぬ噂が立ってしまう。学園長の話が終わったところにも寄らず、そのまま部屋に戻りたい所だな。

「今日はSHR以外は何もなかったはずですよね？」

「うん、何も無いけどどうして？」

「…はあく、学園長に呼ばれるってだけで教室に変な噂が出回るかもしれないんですよ。教室に戻って学園長と何を話したのか？とか聞かれるのが嫌なんです。まあ、誰とも仲良くしない宣言をしたので、聞かれることは少ないかも知れませんがね」

「なるほどね、資料に書いてあった通りだ」

そんなことまで資料に書いてあるのか？ギフト保持者ホルダーなら落ちることないのだが、面接では自分の性格を隠し通したはずなんだが…。「本人の手によって書かれていない資料ほど、信頼のある紙とは思えませんね」

「この資料は、殆ど確信を持って言える程に正確だよ」「そうですか」

面接時には自分の性格を隠し通したはず…：…なんだがなあ。となると、面接官にギフト保持者ホルダーが居たということか？

身体操作コントロールを使い、記憶領域を集中させる。面接官は全員で5人だったはずだ…：確かに全員二、三十代で若かったが、ギフトを感知した際には反応を見せなかったはず。あの部屋に居たのは…：。

「面接の時に居た部屋はマジックミラーになっていた、という事か」

小声でそう言った。

ピタッ

先生の足が止まり、こちらへ振り返る。小声で言ったので聞こえてないと思ったが、どうやら聞こえていたらしい。

「どうしてわかったの？」

「資料を確認してみたらどうですか？」

意地悪に答える。

「あなたのギフトはコントロール。集中力や肉体の動きを最適化させて、自分の意志でコントロールするものでしょう？」

「まあ、そうですが」

コントロールはC級に区別されるギフトだ。C級はギフト中でも比較的 안전 と判断とされている物なので、俺はこれに設定して日常生活を送っているのだが……面接の時点で設定したのは正解だったよ
うだ。

マジックミラーの奥に居たであろうギフト保持者もしかすると、性格を読み取る以外にもギフト保持者の内容を把握出来るものだったのかもしれない。

「面接途中にギフトを使って、部屋全体を記憶領域に集中させて確認したのかもしれませんが？」

「それはあり得ないかな、面接部屋にはギフトを使えない特殊な部屋になっているから、東雲君が言っていることは嘘になるよ」

「そうかもしれませんがね。まあ、これ以上聞かれると面倒なのでこの話はこれくらいにしておきませんか？お互いその方がいいと思いま
すし」

このまま話を続けてしまうと、要らない墓穴を掘りそうだ。

「うくん、少し気になることがあるけど……東雲君がそう言うなら止めておこうかな」

「ありがとうございます」

そんな話をしているといつの間にか学園長室の前に着いていた。浮嶋先生は学園長室のドアをノックし、どうぞと入室の許可が下りた所でドアを開け、中に入る。

俺も続いて中に入ると、目の前のソファに座っていたのは……俺を呼んだ学園長と、眼鏡をかけて優しそうに微笑んでいるが、どこことなく嫌な気配がする男子生徒だった。学年は……校章の色を見るに三年か。三年の誰か分からない男子生徒と俺が、何の関係があるんだ？

「そう身構えるな東雲楽、今日この部屋に呼んだのは君だけじゃなく、全クラスの代表者一名ずつに来てもらっている」

「代表者……とは？」

「詳細は後で話すが、ざっくりと言ってしまうえばクラスのリーダーの立場だ。有り体に言えば委員長という存在か」

クラスのリーダーか……また面倒な案件を持ち込まれた。俺がこれを受けて得をするメリットは……ポイントが多くもらえる……といったところか？だが、そんなメリットが在ろうが無かろうが関係ない。俺は楽をしてポイントを稼いで、七位ギリギリというあまり目立たない順位で卒業したい。七位でも目立ってしまうだろうが、偶然と考えてくれる人は居てくれるだろう。だから……

「学園長は俺の資料を見なかったんですか？面倒臭がりでCランクのギフトしか持っていない俺を、クラスの上に立つリーダーにしてもいいんですか？」

学園長は俺の本当のギフトについては把握してはいるだろうが、先生と初対面の男子生徒の前では本当の事は言えないだろう。だからこんな言い方をした……が、プライバシーをすっ飛ばして言ってしまうかもしれない——という考えは出てこなかった。

思考を読めば学園長の方も俺のギフトを公言するのは、極力避けたいらしい。

「私が君を推している……というのは駄目か？」

「駄目ですね、自分よりもリーダーに押せる人は居たはずですよ。自分が見た感じだと、適任の人は一人いましたが」

学園長は一瞬考え、こう言った。

「君が言う……適任者の名は？」

「藤宮涼葉です」

もう一度顎に手を当てて考える、今度は深く。

「分かった、ではこうしよう。浮嶋先生のクラスでのリーダーは藤宮涼葉としよう」

「それでいいと思います」

「そして、それを陰で支えるリーダーを君にしよう」

「!?」
そう来たか!?だが、まだ抜け道はあるはず。意識を集中させ、次に出す言葉を組み立てる。

「ですが、リーダーが二人いるのは問題ではないのですか？」

「それに関しては問題ない。私が学園長であることを忘れたのか？そ

うでないとしても、ここに居るのは浮嶋先生と生徒会長と私と君だけだ。他言無用だと約束させればいいだろう」

学園長は生徒会長と呼ばれた男性の方を向くと、生徒会長は微笑みながら無言で頷く。

「では何故、自分を表のリーダーに強制的に任命しないのでしょうか？」

「なに…それだと面白くないだろう？」

つまり、最初からこれが目的だったと言わんばかりの答えだった。最初から学園長の手のひらで踊らされていたのか……。このまま話していても平行線になるばかりなので、さすがの俺も折れる。

「……些か不満ですが、分かりました。もし、自分が面倒くさいと感じた案件が起きれば、何を言われようが動くことはないのです、それを念頭に置いておいて下さい」

「分かった。では、藤宮涼葉に関しては浮嶋先生から伝えてもらおうか」

「はい、分かりました」

俺の後ろで先程まで何も発しなかった先生が反応し、学園長室を出た。これから藤宮に連絡しに行くのだろう。

「生徒会長」

「はい」

「これで、一学年全員のリーダーが確定した。把握したか？」

「彼の言う藤宮涼葉の外見に関しては、まだ見ていないのでわかりませんが、後程個人で見に行きます」

「そうか。ああ、東雲楽には言っていないかったな。君の目の前にいる男子生徒は、この学園の現生徒会長だ。」

「初めまして、よろしくね」

「初めまして…こちらこそよろしくお願ひします」

優しそうな声で手を出してきた。俺もそれに答えるように手を握る…その瞬時に生徒会長のギフトを感知するギフトを展開した。内容は攻撃系統のギフトが二つ、防御系統が一つか…全てA級のギフトであることに驚愕したが、一番驚いたのは所持しているギフトが二つ

ではなく三つだったからだ。

基本のギフトは最大でも二つまでと公表されているが、俺がそうであるように三つ以上持っているギフト保持者が居る事は予想していた。まさか、目の前に居る男が三種ギフト保持者…所謂、マルチギフト保持者^{ホルダー}だったとは。

「東雲楽、生徒会長が所持しているギフトはいくつある?」

俺は少し学園長の方を睨み、今の結果を答える。

「三つですかね?」

生徒会長からは笑顔は消え、俺を睨む。しかしすぐに笑顔に戻って、こう言った。

「他言無用だよ」

「勿論…そのつもりですよ」

それだけ答え、俺は学園長室を出た。

「東雲楽の事をどう感じた?生徒会長」

生徒会長は眼鏡をはずし、東雲楽が出たドアを睨み…学園長の間に答える。

「今年の一年生は、面白くなりそうだ」

眼鏡を着けなおして、そのまま学園長室を出た。

「取り敢えず….:小手調べだ」

天然(?) 少女の危機と不明ギフト

学園長室の部屋を出た俺は、これから俺の家となる寮へと帰ろうと
していた。

「畜生、裏のリーダーなんてなるもんじゃねえよ」

そう下を向いて頭を掻きながら零すと、目の前に知らない誰かが止
まり、俺の行く道を塞ぐ。それに気づき顔を上げると、何とも可愛ら
しい女子がいた。制服を着ていることから学生であり、同学年という
事が分かったけれども、少し幼いようにも思えた。

「すみません」

そう言って、道を塞いでいる女子生徒の横を通ろうとすると。

「リーダーですか？」

「は？」

いきなり…予想外の質問を振られた。こんな場所で誰とも知らな
い男子生徒に対し、的の中心を射るような質問をするものか？リー
ダー……何と答えるのが正解なのだろうか？

「あなた、他クラスのクラスリーダーですか？」

「クラスリーダー？聞き覚えもない話だ…そのような役職になる程、
俺は優秀では無い」

少し自傷気味に答えてみる。

「いえ、分からなければ大丈夫ですよ。御止めしてすみませんでした」
「いや、問題無い」

律儀に礼をして来た。以外にも潔いな、もつと追及してくるものか
と思っただが…いや、これは俺の生活にとつての警告と受け取っておこ
う……返事に注意しなければ、変に監視されかねないからな。今後の
動向に意識してみるか。

目の前の女子生徒は頭を上げる。その所作はどこかのお嬢様では
ないかと思ってしまう程に綺麗だったが、その場合天文学的数字の確
率で生まれてきた……ということになるので、この思考は破棄した。

「では…失礼します」

「ああ」

名前でも聞いておくべきだったか？彼女の周辺を調査する事は無いと思うが、一応聞いておいて損は無いからな。

女子は俺が来た方向に行き、俺は少女が来た道に行く。歩き出した時に思考するが、集中する必要はないだろう。あの女子生徒はクラスリーダーの事を知っていた……という事は、あいつがクラスリーダーだという事か？

たちばかのん
「橘奏音…以後、お見知りおきを」

「!?」

読まれたのか!?!いや、有り得ないな…ただの社交辞令だろう。

しかし、頭の片隅に置いておいて暇の中の暇な時間が出来たら、少しだけ思考を片寄らせてみるか。

—橘 view—

楽の後ろ姿が見えなくなった事を確認して、少女は携帯を取り出して通話を開始する。

やくら
「櫓君が想定していた東雲楽君と接触しましたが、本人はクラスリーダーという事を否定しました。ええ、はい…分かりました。浮嶋クラス、東雲楽の監視は続行します」

少女は携帯を仕舞い、楽が来た道を進んでいった。

楽は学園を出て寮に帰ろうとした時、ふと思いつく。

「あ、晚饭買ってないな。寮に帰る前にショップピングセンターで晚饭買っていくか」

この学園は本州から離れているという事もあり、生活には困らないほど設備が充実している。本州から遠ざける意味は…やはり、ギフト保持者の保護と監視をするためなのだろう。

「胸糞悪い」

そう小声で零し、ショップピングモールへと向かう。十分程でショップピングモールへと到着して、食べ物を買って漁る…と言っても大体がカップラーメンやお惣菜だ。なぜ料理なんていう面倒くさいことをしなければいけないのだ。

そう頭の中で唱えながら自分の口に合いそうなお惣菜を選別していく。決まったらそのままレジへと向かい、無駄な動きをする事無く、寮へと足を進める…はずだった。

「ん？」

目の前に何人かの男子生徒に引つ張られ、薄暗い裏路地に入って行く藤宮涼葉の姿があった。浮島先生と話をしたのだろうか？男子生徒の集団と藤宮に興味はないが、裏路地に連れて行く男子生徒の心理についてちよつとした好奇心…という事を口実にして、彼らについて行くとしよう。

「好奇心だから仕方が無い」

もう一度自分に言い聞かせて裏路地に近づいた。壁に寄りかかって腕を組み、耳に意識を集中させる。

「それで、クラスのことについての話ってどういう事？」

「お前が言っていた、協力とやらをしようと思っただけ」

藤宮は今の危機に全く動じていなかった。この状況をどうにかする手立てがあるというのか？というか、この男子生徒たちってクラスメイトかよ。

「協力!?ほんとに?」

「お?おう!」

前言撤回、この状況を危機と感じていないだけだ。天然と呼ばれる性格を持つているみたいだな…ん、それはおかしくないか?

俺が考えている間に同クラスの男子生徒たちは藤宮の口を塞ぎ、手を拘束した。藤宮はこの時点で、やっと自分の危機に気づいたようだ。

「協力してほしかったら、無駄な抵抗はするなよ?」

「んんんんんんんんん」

流石に力がある男子の方が優位だろう。藤宮の口を塞いでいる同クラスメイトは、手を藤宮の胸へと伸ばす。俺はこのまま帰ってもいいかもな…とも考えたが、藤宮には勝手にリーダーに指名した借りがあるな…と自分の中で理由を付ける。それと裏のリーダーとしての責務を果たす、という意味合いでも助ける意味はあるかもな。

「俺たちが身も心も美味しくいただいてやるからな」

そんな悪役じみたセリフを口にしながら手を胸に触れようとする……瞬間、俺は腕を組むのを止めて平手にし、その手を勢いよく地面に叩きつけた。

「ヴがあアアアアあああああああ！」

「な、なん、だこれ：からだ、が、うごかな、い」

「こんな、の、見たこと、ない、のうりよく、だろ！」

「つぶ、つぶされるあああああ！」

男子生徒たちは上から何かによって押さえ付けられるように地面はりつけに磔はりつけられていた。

もつと叫んでもらって構わない：ここら一帯は特異空間ディファースペースによって声を聞かれることは無いだろう。更に腕に力を入れると男子生徒たちは、より苦しみの声を上げる。

すると……

「そこにいる人、もう止めてあげてください！もう彼らに抵抗の意志は無いと思います！」

「!?」

気付いているのか!?そんなはずはないだろう：俺は壁に寄りかかった時点で、気配を消失させたはずだぞ。まさか：また眼か？

危険だと感じた楽は重力グラヴィティコントロール操作を解除し、その場所から離れた。

— 藤宮 view —

「あれ、どこかに行っちゃった？お礼言いたかったんだけど……。まあ、この学園にいるだろうし、いつかお礼を言いたいな」

藤宮涼葉は学園の救護班に連絡し、男子生徒たちを運んでもらった。

「それにしても、笹倉君がさっきのギフトを見たことない：つて言ってたっけ？私も見た事が無いし……本にもそれらしいギフトが書いてなかった気が……」

さっきの光景を思い出して、頭に疑問を浮かべながらその場所を離れて寮に帰るのであった。

学園最強のギフト保持者《ホルダー》 前編

俺は藤宮涼葉と男子生徒との一件が起こった後、誰にも見つからないタイミングで^{ロスサイン}気配消失を解除し、すぐさま寮へと帰った。

「はあ〜」

長い溜息をつく。その原因というのも、藤宮涼葉が使っている眼についてだ。あの能力には俺ですら知らない中身を持っているのかもしれない。

調べるか？ いや、不可能だな。今日のSHRの前に俺が言った事を考えると、恐らく藤宮の取り巻きが俺と藤宮を近づくことすらさせないだろう。

「藤宮涼葉が一人でいる時を狙うか」

頭の中で優先度の高いタスクとして設定しておいた。そこでふと自らの本来あるべき姿を思い出す。

「ちつ、普段ならこんなこと考えずに本を読んで寝ている筈なのに……」
入学式というイベントが、俺も他同様に高揚させているのだろうか？

「まあ、今日だけだ……今日だけ」

目の前の何も無いただの空間にそう言い訳を述べ、^{おもむろ}徐に鞆に入っている本へ手を伸ばす。そして本を開き集中し始めて一日という短い時間だったが、何故か久し振りの感覚に気分がリフレッシュさせることが出来た。

「今日は一冊しか^{イート}吸収してなかったからな。入学式つてことで二冊で終わらしておくか」

再び独り言を呟くと本を読むことに没頭し三十分で読み終え、翌日の準備をして就寝した。

ー翌日ー

「面倒くさいな」

やはり、昨日は入学式という事で相当興奮していたらしい。今日はギフト能力測定と言うテストの様なイベントがあった。分かりやす

く言えば身体ではなく、ギフトの体力測定である。

通常、イベントの次は余韻の日々が来ると言うが、新しい出来事には更に出来事が起こるように、イベントの次にはイベントが来るようだ。

入学式の高揚は覚め、ギフト能力測定で再び高揚することは無く。ただ単に面倒くさいという感情が脳内を駆け巡っていた。

「もし、その場にギフトの中身をを視るギフト保持者ホルダーが居れば、数倍は面倒くさい事になるぞ」

対策せねば、と言ったところで三分経ち、朝食Ⅱカップラーメンが出来上がった。楽はズルつと食してすぐさま学校へ足を向ける。

「……疲れた」

イベントがある時と無い時とで、こんなにやる気が変わるものなのか？昨日は平気に学園へ行けていたが、今日は学園への道を九割着いた頃には、気力がほぼ皆無と言える程に無くなっていった。

自分の場合、体力が無くて疲れるのではなく、気力が無くなって疲れる場合が多かった。

そんな気力のない俺に、後から俺に目掛けての気配が近付いて来た。

「東雲君、おはよう！」

朝から元気な声で俺の名を呼び挨拶してきた。

「ん」

無視することも考えたが、わざわざ肩を叩いて挨拶してきたので振り返ると、そこには少し前屈みに上目遣いをしてくる藤宮涼葉の姿があった。勿論、こっちは挨拶する気など毛頭ないので無視して先に進むことにした。

俺が彼女を見て一言感想は？と、聞かれたならば「あざとい」と答えらるだろう。

「ああ」

背中から残念そうな声が聞こえる。返事をされなかったので肩を落としているのだろうが、俺にとってはそんな事を気にする必要も無い。そのまま靴を履き替え、教室へと向かった。後ろシャツを引かれ

ている気がするが、無視して歩く。

そして、教室のドアの前で立ち止まった。

「離せ」

たった一言、俺はこれで通じるとばかり思っていた……。

「え？」

全く分かっている気配が無かった。耳鼻科に放り投げたい気持ちになったのは初めてだ。

「お前が掴んでいる俺のシャツを離せて言ってるんだ」

「あ、ああ〜これね。えへへ、つい癖で親しい人のシャツを掴んじやうんだよねえ〜」

そんな癖、あるわけが無いだろう。昨日の時点で藤宮の天然さ加減は把握したつもりだったが、俺の想定以上だったらしい。

藤宮はそつと掴んでいたシャツを離すと、こつちを向いてはにかんだ。

「東雲君、おはよう」

二度目だ。

「しつこい」

藤宮が二度も言うのならば、こちらも二度目の反応をくれてやろう。

「もお、挨拶くらい…」

云々言っているが、会話が終わったと自己解釈させて教室のドアを開け、中に入る。

朝のSHRの五分前ということもあり、そこそこのクラスメイトたちが談笑していた。しかし、俺が入った刹那……全員がこちらを向いて唾然としていた。

何に対して驚いているのかは分からないが、別に気にするようなことでもない判断したので、そのまま歩き出す…

と、また後ろシャツを掴まれていることに気がついた。

「おい」

少し威圧的に背後へ声を掛ける。

「ごめんなさい、癖でー」

「そんな癖はありえない！」

掴まれていた手を振り払い、他の目を気にすることなく自分の席に着く。俺が座るまではコソコソと話をしていたクラスメイトたちだったが、次第にターゲットが外れて話し始めた。

「涼葉、あいつに何かされなかつた!？」

「ん？大丈夫だよ。寧ろ私がいっもの癖で東雲君のシャツを掴んでやってたんだ」

「あるよね」

無いだろ……え？最近の女子って、そういう事をするのが普通なの？

頭を唸らせる疑問点が幾つも出てくるな。最近のく、という言葉で終わらせてはいけなと思うってしまったのは俺だけなのか？

「でも、あまりあいつには近づかないほうがいいと思うよ？」

「うくん、でも悪い人ではないと思うんだよね。」

「涼葉、人にすぐ騙されそうだよね……」

俺もそう思う……というか、さつきから何を聞いてるんだ俺は。止めた、本でも読んで静かに時が進むのを待とう。

「でも、私は東雲君を悪い人だとは微塵も思わないかな……だって、昨日も……」

「昨日？」

「……うん、何でもない」

すると、教室のドアが開いて浮島先生が入ってきた。

「座って、本で行われるギフト能力測定の説明をするよ」

友達の席に行って談笑していた生徒は自分の席へと帰っていく。勿論、俺は何処にも行っていないので、そのまま先生の話に耳を傾ける

「よし、それじゃあ説明するね。ギフト能力測定はあなた達のランクを測るために、実際にギフトを使って行う測定よ。最低はE級で、最高ランクはS級とされているけど……実際にS級を出した生徒が居ないから、多分、今年もS級は出ないと思ってね」

S級は出ないと思った方がいい……か。なら出力するならA級に設

定した方がいいか？

そこで、丁度ギフトランクの話をしているクラスメイトの会話に耳を挟む……

「これでA級とか出た人って絶対モテるよなあ〜」

「まあ、有り得そうだよね」

ふむ。B級に調整した方が良さそうだ。自分の容姿が良いと思っている訳では無いが、A級を出した好奇心で周りに人が寄ってくるなんてごめんだな。

「測定結果によつて、今後の実技試験によるボーダーラインが設定されるから全力を出して頑張つてね！」

説明と言うには些か短いとも思ったが、まあ概要は分かったからいいか。

取り敢えず下の上辺りの力を出せば、今後の生活に支障が出ない程度の結果に期待できるという事か……わざわざ調節するという事自体が面倒だが、調節する時間と問題が起こる時間を天秤に載せれば、断然調節する方を選ぶ。

重たい方を取る愚か者は俺が思い付く限り……一人しか居ないな。チラツとその一人へ視線を向けて、本当に有り得そうだと心の中で納得していた。

―実技場―

「よし、それじゃあギフト能力測定を始めるぞ。各教室の担任から説明をして貰っていることを前提に話をする。」

整列し終わるとすぐに先生によるレクチャーが始まった。

「ただ、一っだけ話しておくが、一切の手は抜かない方がいいからな。学園長も見に来て下さってるんだから手を抜いて試験を受けていると……何言われるか分からんぞ?」

と、テンプレとされているような厳つい顔である実技の先生からの挨拶を受け、個々に分かれて試験という名の測定を受けに行く。

測定というのは考えればすぐ分かる事だが、それぞれのギフトによつて異なる。

測定場所でギフトを自己申告し、そのギフトに合う測定方法を用意して貰う。

「東雲楽、ギフト名コントロール身体操作」

そう発言すると、目の前に対人用の戦闘人形AIとナゾナゾのような問題が書かれた紙が用意された。

問題を解きながら対人をする時の意識をコントロールしろ。という事か……多分違うな。そんな場面は人生でワンシーンも遭遇しないだろう。恐らく、順番にやれという事だろうが……面倒だな。

開始の合図が鳴り、コントロール身体操作を継続的に使用し始める。

「こういった事は……一気に片付けた方が楽だ！」

という考えもあり、脚力をコントロールして高速移動している間に問題を片手に取って、戦闘人形AIとの戦闘を始めた。

それから楽は難なく試験をこなし、高難度な操作をせずに基礎をなるべく成る可く駆使して測定を進めていった。

判定は測定前に考えていた通りにB級とA級の間だ。

測定も終盤に差し掛かり、最後に来る測定は試合形式のものであった。ギフトによっては攻撃に向いていない者もいるので、先生がリストアップした者同士での試合となる。

順番に呼ばれて試合を始めていく。試合を観戦して見る限り、特出してギフトを使用する生徒は……ざつと十人ちよつとか。

入学式に俺を殺そうとしていた橘も、この中では特出している部類に入るだろう。

と、俺が中々呼ばれないと考えている同時間、もう一人……俺と同じような心境を漂わせている……天然愚か女がいた。

そして、俺の予想通りの展開が起こる……起こってしまった。

「最後の組は、東雲楽と藤宮涼葉」

「……はあ〜」

よりによって藤宮なのか……それよりも先ず、こいつは攻撃システムのギフトを持つてるのか？

まあ、最後には藤宮に花を持たせて終わらせる算段を考えておこう。

「東雲をギャフンと言わしてきてね！」

「藤宮さん頑張つて！」

「あんなボツチ根暗野郎に負けるんじゃないぞ！」

全員が藤宮涼葉を応援していた。一人ぐらい俺に期待する人は：居ないだろうな。

いや、観客席に居た。

俺が学園長の方を向くと、学園長は軽く手を振る。……学園長に期待されちゃ仕方がないな。B級とA級のラインを守りつつやってみるか：まあ、最後には負けるけどな。

「両者前に出て」

俺と藤宮は一步、足を踏み出す。

「開始！」

ビィィィィィィィ！！

試合開始の合図が鳴る。しかし、俺も藤宮も一步も足を踏み出さずに相手の体全体の動きを見る。こういった戦闘は模擬だとしても妥協すること無く相手の裁量を見極めなければならぬからだ。

「…はあ」

俺は模擬戦闘用にギフトを設定し直す。特殊系統ユミクのギフトをロスサインロスサインに設定し、攻撃系統のギフトを身体操作コントロールに保持したまま設定した。

身体操作コントロールは移動と攻撃の応用として使用するが、これぐらいで勝てるだろう……元から勝つ気はさらさらがないがな。

設定を終了し、気配消失ロスサインを使用する。

「消えた!？」

「ど、どういう事だ?」

気配消失ロスサインはA級寄りのB級だと言われているとしても、目の前の人間が消えたら誰でも驚くだろう。

「……」

それにしてもおかしい、藤宮は目を開けたまま動こうとしない。一つ目のギフトは眼である事から、二つ目のギフトは攻撃系統のギフトじゃないとこの試験に出ることは出来ない。

なら、なぜ動かない？俺が消えてる時点で眼は使えない筈だぞ。何かしらアプローチをしようとはしないのか？

「…ちっ、つまらん、終わらせるぞ」

藤宮へ聞こえるように発する。

そして、別に走ることもなく後ろへ回り込み、藤宮の背中を目掛けてコントロール身体操作で筋力を強化させた手刀を下ろした……っ!!

「……」

刹那、俺はロスサイン気配消失まで解除され、仰向けに倒れていた。

「やったー！」

藤宮は子供のようにジャンプして喜びながら、この試合の勝利を喜んでいた。

俺は何をされたのか考えたフリをして、思いついたように次の言葉を発した。

「なるほど、フルカウンター完全反撃か」

「分かったの!?私の二つ目のギフトだよ!」

こつちを向いて微笑みながらそう言った。

「そうか、最初から勝ち目はなかったというわけか」

「そういう事!」

少し棒読みな演技だとは思ったが、バレることも無く元の場所へと帰ろうとすると……

「両者、最初の位置に戻れ!」

観客席からそんな言葉が聞こえた。

皆が声のした方へ振り返ると、そこには学園長が腕を組みながら嫌な笑みを浮かべていた。

そして、その嫌な笑から零れた言葉も、俺にとっては毒のような言葉である事に違いは無かった。

「東雲楽、S級まで……許可しよう」

「……S級?」

何事も無く過ごせる世界は何処にあるのだろうか？

もしあるのならば、今すぐにその世界へ引越したいという気持ち

が、心の中を駆け巡ったのであった。

学園最強のギフト保持者《ホルダー》 後編

俺にとっては毒のように浸透して殺してくる学園長の言葉が、この場にいる生徒全員を困惑させた。

一言が、学園長の一言だけが俺に裏切りの意思を向けるような感覚に陥らせたのだ。

しかし、それを気にする素振りもなく、学園長は説明する。

「但し、S級の使用許可は一種類だけだ」

俺が聞きたいのはそこではない。決まりでは無く、対応^{アフター}を聞きたいのだ。

「そう焦るな。お前が最も懸念している部分は私では解決することが出来ないが……お前なら出来るはずだぞ?」

なんて他責なことを言いやがる。上からの命令によって暴れさせられたが、後片付けも自分でさせる……自己責任という言葉を押し付けられている状態ではないか?

そんな事ならわざわざ数百の目があるこの場で行う必要性は無いだろう?

「こんな大人数を一気に記憶改竄^{メモリーチェンジ}出来るわけがないでしょう」

数クラスの改竄は可能だろうが、この場にいる全員という事であれば許容範囲を超えている。俺には、更にそれ以上の懸念も存在していた。

俺は不機嫌そうに学園長へ抗議の目を向けた。

「観戦を希望する生徒の他は私のギフトを使用して目を塞いでやろう。S級となると効果範囲や二次被害の危険性があるから、戦闘フィールドは坂本に展開させる」

顔が厳つい先生の名前は坂本と言うらしい。そんな事はどうでもいいが、S級までの使用許可が下りる……か。先生一人のフィールドで衝撃を耐えられるのか?

「東雲楽、手を抜こうとするなよ?手を抜いたと私が判断した瞬間、お前のポイントがマイナスから始まるかもしれないぞ」

「なっ!」

なんて横暴な、どつかのガキ大将でもそんなに横暴なことは言わないぞ？と、頭の中でツツコミながら溜息を漏らす。

学園長に好意を寄せていたわけではないが、少し仲間意識を持っていた俺としては、俺への対応に肩を落としてしまう。

もしかしたら、この試合は全力で戦っても良いという学園長なりの気遣いというものだろうか？

「坂本先生、フィールドは最大の厚さに展開してもらっていいですか？」

坂本先生に言うやとすぐに領域作成フィールドというギフトを使い、一定の空間にダメージの入ることのない特殊な空間を、模擬戦闘が行われていた時よりも濃く展開した。

学園長の言った、「S級まで許可する」という言葉をしっかりと理解しているのだろう。坂本先生はA級ギフトの全力を出し、最終展開を終える。

「これ位で大丈夫か？」

目を閉じ、戦闘領域と通常領域との壁圧を感知した。

「……少し足りない気もしますが、これ位でもギリギリ耐えてくれると思います」

俺の言葉に坂本先生の顔が青ざめたが、すぐさま覚悟を決め、S級というほぼ未知数の実力への期待を込めて顎を引く。

「では、覚悟のある者はそこに残っても良い。浅はかな覚悟でその場に居ようという者は今すぐに観客席へ上がれ」

学園長が威圧的な態度でこの場にいる全員に向けて話す。

好奇心で残るものが多いと予想したが、最終的に残ったのは半分だった。勿論、測定時に好成绩を出していた生徒は俺の見る限り全員残っている。

観客席に上がった五割の生徒はこれから起こる事への恐怖心で一杯のようだ。

「それでは、私のギフトで目を見えなくさせる。一時的な盲目状態になるだろうから、そばに居る友達と手を繋ぐと恐怖心が和らぐだろう」

そう言うと、学園長は左手を観客席に居る生徒に向けてゆつくりと覆い被せていく。

「え？前が見えない！」

「暗っ！怖いぞこれ」

いきなり目の前が見えなくなったことに驚いて恐怖している生徒が殆どだった。

「静まれ！君たちの気持ちも分からなくは無いが、今から大事な試合があるんだ。うるさくしていたらこの場から去ってもらおうぞ」

その一言で少しずつ静かになる…恐怖政治かよ。

藤宮は学園長が話し出した時から、理解ができないと言った様に棒立ちになっていた。

S級という言葉に脳が処理できていないのだろう。

「すまないな、学園長の我儘に付き合わせてしまつて」

「……相手って本当に私？」

ここまで大事になっているんだ。辞めたいと思うのもおかしくは無いだろう。

「まあ心配するな。坂本先生の領域作成ファイールドのお陰で体に傷は負わないから……多分」

「多分!?怖いんだけど？」

壁圧が想定よりも薄い……威力が大きければ領域作成ファイールドが壊れる可能性がある。

「少しは手加減する、恨むなら学園長を恨んでくれ」

そう言つて目を瞑り、制限設定リミットセットにをす。S級までの能力を一時的に解放した。設定を終了して目を開けると、有り得ない程の情報量を吸収した。

藤宮のギフトである眼と完全反撃フルカウンタの対処方法を全て、この試合における勝利への道筋が決定した。

「面白いな」

目の前にいる藤宮はさっきの試合と違い、かなり怯え、震えていた。だが、彼女には可能性が一筋だけある……しかし、それに気付くことは出来ないだろう。

一瞬で終わらせるのはナンセンスだ。ならば、藤宮に勝利の道筋を見つける事が出来るのか…試験を行ってやる。ついでに藤宮が使用している眼を実際に使用させて、効果を検証してみるとするか。

「それじゃあ…行くぞ」

A級に格上げした気配消失ロスサインを使用し、先程の試合の様に気配を消す。藤宮はこちらでも分かるように眼のギフトを使い、周辺探知サーチをかける。先程の試合で負けたのはこれが原因だったようだ。

「…探知出来ない!？」

そう声を上げて目を見開く。俺は敢えて目の前に止まり、一瞬にして重力操作グラヴィティコントロールを使って地面に押さえ付けた。

「う、ううううこ、これっ……てっ!」

昨日の出来事と重なったのだろうか、今はそんな事を考えさせたい訳では無い。

「分からないのか?」

重力操作グラヴィティコントロールを更に強めて、藤宮へ危機感を感じさせる。

領域作成フィールドというギフトには欠点が存在する。

体への外見的な傷は残らないが、重力操作グラヴィティコントロールのような体内や心への傷は有効になってしまうのである。

「早くしないと潰れるんじゃないのか?」

「だ……はあ、はあ、だったら…!…うあ、は、はやく……おわらせてよ!」

完全に諦めに入っているのか、そんな生温い考えをさせる訳にはいかないな。

俺は藤宮を高圧的に睨みつける。

「っ!」

藤宮は何かが来ると感じ取り、体を縮こめて目を瞑る。だが、別に俺はこの戦いを終わらす訳では無い。

「お前のギフトは何の為にあるんだ?」

「私の…ぎ、ギフトが……」

重力操作グラヴィティコントロールを少しだけ緩め、藤宮へ問い掛ける。

「正直言って幻滅した。全員を保証を持って卒業させる、と、意気込ん

だ奴がどんな行動をするのか、本当に期待をしていたんだがな」

正直な感想を藤宮へ放つ。俺が強いからと言って、負ける事を許容するという考えが気に入らない。

ならば、少しばかり諦めることを諦める、という考えを藤宮に教えてやらねばならないようだ。

手始めに重力操作を解除する。

「どういう事？」

「お前が、お前自身のギフトについて知識が浅いようだから、特別に実技授業を施してやる」

氷の造形ギフトを使いナイフを作り、藤宮へ勢い良く刺しにかかる。

「っ！」

それを完全反撃を使って綺麗に跳ね返す。この使い方は正解であり、基礎の使い方でもある。

しかし、藤宮はそれを……

「物理だけ跳ね返すと、ばかり考えていないか？」

「え？」

文字の意味を理解すれば子供でも分かるようなものだ。確かに、反撃をする内容は自分自身に当たる攻撃だと思うが、それが物理だけに限らない話である。

「次だ」

先程と同様に重力操作を軽めに展開し、藤宮の体を徐々に地面へ近付けさせる。

「うう…は、はあっ！」

次の瞬間、藤宮による完全反撃により、重力操作の効果範囲が藤宮本体外で作用するようになった。

「こ、これって！」

「……はあ、遅かったが…ちゃんと正解には辿り着いたようだな」

完全とは正しく全部である。物理だけでは無く、重力操作の様な空間干渉にも作用するのだ。

恐らく、最初から負けを認めていなければ直ぐに気付いただろう

が、負けを認めてしまった時点で思考することさえも止めてしまうことになる。勝てる相手だとしても、力量で負けていると勝手に思ってしまう事が今回の沼だったのだ。

だから俺は、藤宮に諦める事を諦めさせる為に、このような遠回りの方法で教えた。

「これで特別授業は終わりだ。そして、この模擬戦も……終わりだ」

グラウティイコントロール
重力操作を最大出力にし、藤宮の体を潰すつもりで地面に押す。そして……

「お前の望み通り」

右手を浮かせ、とあるギフトの貯めに入る……五秒後には完全に準備が終えてその右手を藤宮へ向けた。

この学園で見ることの無いであろうS級ギフトの名は……

インフェルノ
「獄炎」

その刹那、地面から爆発音が聞こえ、巨大な炎の竜巻が発生し、グラウティイコントロール
重力操作に対抗しようとしている藤宮を襲った。

炎の竜巻が発生した後も、収まった後も、藤宮の叫び声は聞こえない。

この場にいた殆どの生徒たちから、轟音による恐怖により叫び声が聞こえる。学園長のギフトは目を防ぐ事が出来たとしても、耳は防がれないらしい。

「終了だ」

目の前に倒れている藤宮を抱え、その場を離れた。

「これで満足ですか？」

「予想以上だ。これからも楽しみにしている……藤宮を保健室へ連れて行ってやれ」

学園長はそれだけ告げてギフトを解除し、実技場から退出して行った。

俺もそれに続き、実技場から退出しながら懸念していた部分の解決をする。

俺が指を鳴らした次の瞬間、皆は……

「あれ、何でボーツとしてたんだらろう？」

「今…何があったんだっけ？」

S級のギフトである記憶改竄メモリーチェンジと、あるギフトを応用し、俺と藤宮が二度目の試合をした時からの記憶を空白にしておいた。

だから人前でこの力を出すのが嫌なんだ。俺がこの力を持っている時点で、他の人と仲良くする事は不可能だった。だから俺は独りで、隠れて、楽に、生きる。そんな事を考えながらここまで来た。

「…………ちっ」

一人で居たくないのは本人が一番に思っている事だろうと、それが不可能だと…この学園から教えられた。

ただ、一つだけ面白いものを見れたから…………今回は良しとするか。そんな事を考えながら、藤宮を抱えて保健室へと向かって行った。

「もしも、使えるなら…さ。私を最後に攻撃する時は、そのギフトを使ってくれないかな」

俺は藤宮の事をただの天然なだけだと思っていたが、本当はそうでも無いのかもな。

裏路地での一件は、本当に協力して欲しい一心で話していたのかもしれない。だったら…

「あいつも、侮れないな」

保健室は独特の匂いに包まれていた。どこか心地よい、いつの間にかゆつたりと空気に浸れる…そんな空気だ。

俺がここに運んだ時には保健室内に先生は誰一人居なかった。取り敢えず、最奥に寝かせて俺はカーテンの外にいるが、ここで間違いないなど起こす俺ではない。

だからと言って、カーテンの中で待つという選択肢も無いだろう。相手は女子なのだ、寝顔を見られたくないだとか思っていたら、俺としても申し訳ない気持ちになる。

あまり人と接しなかつた俺でも、止めた方が良いというのは空気感で分かる。

カーテンの前にある椅子に座って目を瞑る。藤宮が目覚まして許可を取るまでここに居よう。

—五分後—

「ん、はあ、はあ…」

カーテンの中から熱に魘されるような声が聞こえてくる。何故だ

…：…獄インフエル炎の影響か？

獄インフエル炎の炎は体内に侵入する可能性はゼロではない。獄インフエル炎自体が生物と言っても良い程に、部分部分で温度が変化しているのだ。

もしかすると、藤宮の体内に一部分が入り込み、悪さをしているのかもしれない。

「…：…藤宮、すまない」

言葉でも心の中でも謝りながら、ゆつくりとカーテンを開けて中に入る。

「はあ、はあ…ん！はあ…：…はあ…」

中には綺麗な寝顔をして寝ている藤宮が居たが…やはり、熱に魘うなされて時々顔を顰しかめめているようだ。

「獄インフェルノ炎の影響なら、俺に責任があるな」

俺はB級ギフトである冷氣操作アイスクールを使用し、藤宮の額に手を乗せて体内の熱を取り除いていく。

「はあ…はあ…ん…はあ…ん、ふう…すう…すう…すう…」

次第に呼吸が整ってきた。これで熱に魘うなされることは無いだろう。

しかし、また手を離れたら熱が戻る可能性がある…冷気を調整してもう少しだけ手を置いておくか。

獄インフェルノ炎の部分炎は、完全に炎が消えるまでは油断出来ない。熱が少しでも残っていれば、再点火の要領で再び炎を発生させるのだ。

少し時間が経つと、温度が丁度いいのか、心地よさそうに眠っている。

—20分後—

「ん……」

俺の前から小さく声が聞こえてきた。

危ない、藤宮の額に手を当てながら寝かけていた。直ぐに手を離れたから気付かれはしないだろう。

「目が覚めたか？」

「う、ううん」

起きてないのかよ、と軽く心の中でツツコミをする。まだ寝惚ぼろけているのだろう、部分炎のせいで風邪の様な現象になったんだ、仕方あるまい。

「起きた…よう？」

「そうか」

起きたらしい。すぐ本題に入つてこの場から離れたいところだったが、こんな状態にしたのは自分のせいでもあったので、もう少し待つてから話そう。

藤宮は起き上がり、目を擦つて状況を把握する。段々と意識が覚醒して何かを考え始めた。

今なら話しても大丈夫か。

「手加減したつもりだったが、完璧には手加減出来なかったみたいだ。すまないな」

「ううん、あの後助けてくれたんでしょ？ならいいよ」

「そうか」

助けてくれたって……熱の事を言っているのか？薄く意識があったのか。

「何か、話したいことがあるしそうな顔してるけど？」

「ん、ああ。もういいのか？もう少し待とうかと思ったが」

話したいこと……と言うよりはするべき事だろうか、俺はそれをするためにここに居ると言っても過言では無い。

「誰かさんのお陰で大丈夫。試合する時より体調が良いかも」

藤宮はこの後起こる事は分からないだろう、なんせ試合後の記憶を消されるのだから。

「そんなはずはないだろう」

薄く笑いながら返す。藤宮は冗談を言っつてふふつと口を隠しながら笑った。まあ、そんな冗談が言えるなら本当に大丈夫なのだろう。

俺が真剣な面持ちで話そうとすると、さっきまでの雰囲気と違う何かを察したのか、藤宮も真剣な面持ちになった。

そして、一言

「俺は、お前に協力するつもりは無い」

藤宮は少し悲しそうな顔をする。

「何でなのか、教えては……くれないよね」

どうせ記憶を消すのだから、今だけは教えてもいいだろう。

「単純な話だ。俺は集団で動きたくない……いや、動けないんだ」

「それって、どうい」

藤宮の言葉を遮り、話を続ける。

「俺はこれ以上お前と絡むつもりもないし、お前が俺に協力を求めた所で協力するつもりもない。今からさっきの試合で起こった記憶を消すから、これから俺の事は居ないものだと思ってくれ」

最後の一言だけを記憶に残しておくか、記憶が復元される可能性は

少なくとも藤宮ならば起きる事は無いだろう。

俺はギフトを使用する為に藤宮に向けて手を広げ、口を開こうとする……。

「待ってー!」

「!?!」

眼が作動した? まだ記憶改竄メモリーチェンジを使用していないんだが……藤宮が使用したのか?

「待って……お願いだから!」

俺が気づいた時には、藤宮の頬に一筋の涙が流れていた。

「何故、泣く?」

泣く理由が見当たらない。

「記憶を、消さないで……」

「無理だ!」

「!?!」

俺が独りで居たいが為に記憶を消すという理由だけなら、ここまでされれば躊躇ためらうかもしれないが、これは契約である。そして、藤宮の為でもあるからだ。

「S級のギフトを見た記憶を持ったお前は、俺にとっての敵だ!」

S級ギフトを使う者達は超重要危険視され、政府によって排除される。藤宮が口を滑らした時点で、俺は政府の対象になり、排除される可能性が高い。万が一狙われたとしても、すぐにやられることは無いだろうがな。

更に、藤宮が口を滑らすという事は、藤宮が何者かによって事件に巻き込まれる可能性も出てくる。

誘拐・監禁・殺害……これらが行われても不思議に思う事は無くなるのだ。

「なら、なら! 敵でも構わないから……私を東雲君の傍に居させてよ!」

「……はあ、何を言ってるんだお前は!」
何故、こんなことを言うのか微塵たりとも理解出来ない。こんなにも懇願する理由は何処にある? 記憶を残したとして、藤宮のメリットになる事は何だ?

「傍に居させてくれるなら、私を…私をどう使ってくれても構わない。それくらいの覚悟は出来てる！」

そう言っている藤宮の目は、今まで見てきた天然の藤宮ではなく、何か信念があるような、本当の藤宮を見ている気持ちになった。

だが……

「待て、そういう問題じゃない。お前が俺の力を知っている時点で学園の監視対象になる可能性が高い。もしそうなれば、お前に危害が及ぶ可能性がある…：そうになったら、俺はお前を守る自信が無い」

もう、あの時のような思いをしたくない。だから俺から離れさせるしか方法は無いんだ。

藤宮を有効的に使うメリットが有ろうと、無かろうと、俺がメモリーチェンジ記憶改竄を使用したくなくても、これはしなければいけない事だ。

「いや、その心配はしなくていいぞ」

声がする方へ振り返ると、保健室のドアにこの学園の長おびがもたれ掛かりながら言った。

「…それはどういう事だ？」

「私が何のために東雲にSギフトを使わせた。ただの気まぐれだ、とても思っているのか？」

そうだろう、そのせいでこんな事をしなければならぬのだから。考えがあつたとしても事後処理を俺にやらせている時点で、学園長自身が責任を持つ、という考えを持っていなかった事になる。

「はあ、全くわかってないな東雲楽」

「何を言いたいんだ？」

「ギフトを使って、私の思考を読んでみたらどうだ？」

「生憎、今はA級以下のギフトしか使えない。次に発する言葉は読めるが、時間が経っている思考まで読もうとすれば、S級まで必要だ」
一つ上位のギフトを使うだけで、能力の内容がガラリと変わってしまう。ギフトが違うのではなく、ギフトのランクが上がったという解釈だ。

そして、俺がいつも使っているのは他思読リーディングというA級のギフトで種類は特殊系統ユニークに入る物だ。しかし、特殊ユニークであるが故に上位の存在が確

認されないのである。

他思読リーディングの本来の内容は、同時刻に目標とする他人の思考を読む。というものだが、これをアップグレードする事によって、未来以外に目標とする他人の思考を全て読むことが出来る。という制限設定リミットセッにを使用する面倒くささへの意味付けとして述べてみた。

「それなら仕方がない…か、なら答えはこうだ。一つは、私が東雲楽と藤宮涼葉の試合をリストアップした。二つ目は、お前達の過去を、私はすべて知っている。最後に、お前のギフトを知っているのは、私と藤宮だけだ」

「…そういう事か。だが、政府の方はどうするつもりだ？藤宮を放置できないだろう」

この学園は政府が作ったものだ。学園長は俺を監視する代わりに政府に報告する事への口止めになっているが、藤宮が加わる事によってこの契約は破綻する。

「だから言っているだろう？この件を知っているのは、私と藤宮涼葉だけだ、と。」

……はあく、学園長も面倒くさいことをしやがる。

「俺個人が嫌だ、と言ったら？」

「お前なら想像が着くんじやないのか？」

俺の事を政府に言う…という事だろう。抜け道はあるか？——思いつかない。この場のイニシアチブは完全に学園長と、その側に付いている藤宮涼葉にあるということか。

「藤宮をどうすればいいんだ？」

「お前の傍に置いてやれ」

「それは拒否する。ずっと付きまとわれるのはこっちの気が散る」

気が散る云々以前に、俺は仲良くするつもりは無いのだ。記憶を残す残さないという話は、ギフトを使う使わないという、一手間を掛けたくはないとの考えの下で悩んでいた思考だ。それが無くなったとしても、藤宮を傍に置いて良いという考えには一切ならなのである。「なら、必要な時だけ傍に居させる…ならどうだ？」

及第点があやふや過ぎる……俺にとっては、メリットよりもダメ

リットしかないのでは？

しかし、これ以上先延ばしにしても帰ろうに帰れないからな……

「……はあ。そう学園長が言ってるんだが、お前はそれでいいのか？」

藤宮は俺と学園長の話を遮ることなく、静かに耳を寄せていた。

「うん！ありがとうございます……学園長」

学園長に対して頭を下げ、意味あり気に感謝の言葉を告げる。

……こいつはどんな過去を持っている？何故、俺の傍に居なければならぬ？そんな疑問が多く浮かぶ。しかし、この場で解消することは出来なさそうだ。

「これからよろしくね！ら、楽君！」

「は？」

「い、嫌だった？」

俺が言い返した瞬間、藤宮は肩をピクつと震わせた。怖がらそうとは思ってなかったが、名前で呼ばれる事に違和感しか覚えない。

「……勝手にしろ」

「やった、楽くん！」

「はあ」

やはり慣れない。今までに俺を名前で呼ぶのはあの人だけだったから……

俺は帰ろうと振り返り、歩き出す。

「接する事は確かに許したが、あまり接触しすぎるなよ。怪しまれたら厄介だからな。これは契や……約束だ」

「分かった、約束するよ！」

まあ、偶にしつかりしている一面を見ると、約束はちゃんと守ってくれそうだから、少し位は気を緩めても大丈夫だろう。

「藤宮涼葉。もう少しで看護の先生が来るだろうから、終わり次第、寮へと戻るんだぞ」

学園長は藤宮へ一言告げ、俺の後ろを歩く。

そして、東雲楽と学園長は保健室を出た。その背中は一憂しそうな者でありながら、保健室の外へと向かう東雲楽の顔は、激怒している者

であったのだ。

A f t e r V i e w 東雲楽の怒りと迷い

もし、自分のパーソナルスペースを侵された時、君たちはどうするのだろうか？

同調する者、拒否する者、閉ざす者と様々だと思うが、そもそもそんな考えをする必要は無かったのだ。何故ならば、そこはもうパーソナルスペースでは無くなっているからである。

俺は今日、パーソナルスペースであった場所が侵され、パーソナルスペースでは無くなってしまったのだ。こんな事をされても尚、激怒しない者が居るのだろうか？

「……」

保健室を出た俺と学園長は無言で階段へと向かう……正確には、俺の背後を学園長が来ている、という状況だ。

少し歩き、階段へと着くが上ることは無く、階段の踊り場で周囲にあった人の気配が消えるまで待っていた。

「……ふう」

周辺探知を掛けて周辺の生体反応を探り、一つも存在しない事を確認すると……

ドンツ！

壁にもたれ掛かり、涼しい顔をしている学園長の顔横に拳を突く。所謂、壁ドンという凶になるが、別に告白をするだとか喧嘩をするという訳では無い。

ただ、学園長に聞くべきこと、と話すべきことがあるからだ。既の所で逃げられるわけには行かないから、このような方法を取っているのだ。

「どうして、こんな事をした？」

俺は一言、学園長を恨むように睨み付けて問う。態々怒りの詳細を一つ一つ言う必要はあるまい。

学園長はようやく目を開けて返事をする。

「東雲楽、これはお前の為だ。私がお前の為を思って、藤宮涼葉という

人間をお前の傍に置いたんだ」

学園長の返事は俺の望むような内容では無く、それは、ただの……
「お前がやった事は……ただの自己満足だ」

学園の長に対してお前と言うなど、全く褒められた呼び方ではない。ただ、目の前の人間に対して敬語で話す気など、今の俺には毛頭無いのである。

この気持ちを、目の前の人間にも感じて欲しいという下衆な考えすらも思い付く程だった。

「現状のお前なら、私の自己満足で行動した、と思っても変だとは思わない。だが……そうだな、あと二〜三ヶ月後にはその考えも変わっているだろうな」

「何を言ってるんだ？」

考えが変わる？ そんな事が起こるわけがない。俺はあの時からずっと、今の考えで生きてきたんだ……二〜三ヶ月で変わるなんて……

「愚かだな……東雲楽」

その言葉は、今の俺にとって着火剤になるには十分だ。気が付けば学園長の胸倉を掴んで、力任せに壁へ押し付けていたのだ。

「愚かだと？」

「ああ、愚かだろう。藤宮涼葉に特別授業を施していたが、お前も必要なんじゃないか？ 特別授業 とやらが」

「この考えが特異である事は分かっている。だが、それが愚かだとは思わないぞ！」

こいつは真実を知らない、ただのギフト保持者ホルダーだから分からないんだ。

「真実」

「!？」

分からない。どうして、こいつからその言葉が出てくるのか、理解も出来なければ、思考もできる程の冷静さも……今の俺には無かった。

「東雲楽、真実という言葉を自分の都合よく解釈しているんじゃない

のか？」

俺が都合よく解釈をしている？

「真実は…ただの結果に過ぎない。お前は被害者であるが故に強く受け止めてしまったが、それをずっと思う必要は無い。ならば、それを緩和させる存在が必要になる」

分かるか？と雰囲気で問い掛けて来る。

「どうして、それが藤宮なんだ？」

俺の心内がそういう状況だと思ったなら、別に藤宮涼葉を使う必要は無いだろう？普通ならば、スクールカウンセラーを使うなどの考えが浮かぶ筈だ。

「少し冷静になって頭を回せ。保健室で私が話した事を思い出してみろ、そうすれば答えが見つかるんじゃないのか？まあ、答え合わせはしないが…な」

冷静に…冷静になる。学園長が言いたい事へのポイントはすぐに思い浮かぶ。

学園長は俺と藤宮の過去を知っている、という点だろう。どうしても俺だけではなく、藤宮涼葉も一括りにしたのか…？考えればすぐに分かる、分かっってしまう内容だったが、俺はそれを信じたく無かったのだ。

「…本当なのか？」

考えを纏め終わったのだと、恐らく察しているであろう学園長へ問い掛ける。

「答え合わせはしない」

答えはそれだけで十分だと、嫌という程に分かってしまうものだ。

まさか、藤宮涼葉は幼少期にあの場所で過ごしていたのか？俺が忌み嫌った、真実を刷り込まれた、現実と自分を失わされたあの場所に…？か？

「…あいつは、俺がどんな使い方をしても良いと言った。お前は俺を止めようとしなののか？」

学園長こいつと藤宮涼葉は、何かの縁で繋がっている。ならば、俺を止める気もある筈だ。

「藤宮涼葉が勝手に言ったんだ、私が止める権限もないだろう。私は彼女の保護者でも、友達でもない……ただの学園長だ」

「……そうか。なら、俺の思うままに使わせてもらう」

藤宮が俺を友達だとか仲間だとか思おうが、俺はそんな関係だと思わない。例えれば、単に同じ趣味を持つているだけの他人に過ぎないのだ。だから、俺は向こうから近づいてきた他人^{ひと}へ、上辺の返事をして偽の仲良しになればいい。

関係を認めず、関係を認める。それがただの自己満足だろうと、他人^{ひと}が勝手にそう思えばいいだけだ。誰もが相互的に友達で居ようと思っていない可能性がある、と、頭の隅に置くことが重要である。

だから、俺は……

「俺の手駒になるならば、上手くやって貰わないとな……」

学園長を掴んでいた手を離し、ゆっくりと下がっていく。

「それでいい。人が変わるには時間が必要だ。ならば、私はその時間を作るだけだ。私の胸倉を掴んだ件とお前呼びにした件は、私の勝手な行動でお前を傷つけた事で、お相子という事にしておこう」

「……期待は一切していませんが、楽しみにしておきます」

学園長に一礼し、踵を返して帰路へ着いた。

何も無く終わらせる筈だった学生生活が、この日を境に、一つだけ楽しみを与えて来た様な気がした。

「取り敢えず、手駒……ゲット」

*あくどくがくき…この話から後の話を、改定前文章バックアップを取っていないので、一から話を書くことになります（この話も一から書きました）ですので、毎日投稿が出来るか分かりませんが…できるだけ頑張つて投稿するようにします！（今は不定期投稿期間中です）（21日まで）

Another View 藤宮涼葉は約束する
SS

気が付くと、右も左も分からない暗闇の中に、私の意識はあった。目を開いている筈なのに前が見えない…ただ、それが心地良いものだということは分かった。私はまだ寝ているの？

熱い…身体が燃えるように熱い。熱にでも侵されたのだろうか？新種の高温風邪なのか？意識が覚醒している感覚はあるのに、覚醒していない不安感に駆られる。迷子になった子供のように、私が今居る場所が分からない。

瞬きをすると、暗闇だった私の周りは炎に包まれていた。まるで、私の体内の熱を映したかのような炎、芯から燃やして喰い尽くす…逃げざる事を断じて許さない炎。

私は諦めるしかないのかな？

選択肢が現れるわけが無い。選択肢を作ることも許されない。炎が私を侵すのを、ただ、じっと待つだけの時間。

「獄炎」
(インフェル)

時が止まる。私の体も、その身体を侵食する炎も、すべての動きが止まった。

すつ、と出てきた一言がようやく本来の意識を覚醒させたようだ。すると、再び時は動き出し、炎は侵食を止めて一つの場所に集まっていくな。ゆっくりと…じっくりと形をウネウネと変えて、変化の終えた姿に私は目を見開いた。

そこに居たのは、私が幼い頃に一緒に居た男の子と、三つの頭を持ち、先程の炎を身に纏った冥界の番犬…姿はまさにケルベロスだった。男の子はケルベロスにリードを繋ぎ、私の目をじっと見定めるように見続ける。

暫く目を合わせたまま待つ。更に時間が過ぎ、男の子はふつ、と軽く笑いながら話し始めた。

「我の主は…もう報われても良いと思わないか？」

「え？」

「私の主は……十分に苦しんだ、失った、壊された」

「誰のことを言ってるの？」

「この姿は、お前の記憶から呼び起こされたイメージだ。俺の名前は……獄炎^{インフェルノ}」

獄炎^{インフェルノ}……ギフトが意志を持っているって事？その主ってことは……もしかして？

「お前なら、私の主を真実から救える素質があると見た。だから、どうか……どうか……私の主を地獄から救ってはくれまいか？」

段々と獄炎^{インフェルノ}が薄れていく。それと同時に、何処からか涼しく、気持ちの良い風が流れ込んで来た。こびり付いていた身体の熱を剥がしてくれる、私が光を感じると共に獄炎^{インフェルノ}も、より薄くなって肉眼では見えなくなる。

「さ、最後に！あなたの……主の名前は何!？」

「……東雲……楽」

……やっぱり、そうなんだね。

私は目を覚ます。ここは、先程までの空間ではないことはしっかりと感じていた。ただ、何故だろう……安心する。久し振りに家に帰った時の感覚に駆られている。

「目が覚めたか？」

「ううん？」

寝惚けて間違った答えを返してしまった。そして、目をしっかりと開くと……そこには今一番話したい人が居た。夢で見た獄炎^{インフェルノ}の主、私が救わなくてはいけない相手である……東雲楽が目の前に座っていたのだ。

救わなければいけない……何故だか、嫌な気はしなかった。逆に助きたい気持ちで、心が一杯になっていく。

私と東雲楽君は話した。彼は私の記憶を消したいらしい……でも、

駄目だ。夢の記憶も無くなってしまえば、私は彼を助けることが出来ない。そう思うと、自然と涙が出てしまった。

女の子の奥の手を使っちゃったな、彼に申し訳ないな……助けてあげたいな。

学園長が入って来て彼を説得してくれた……そして、納得してくれた。しのの……楽君を助けてあげられる。この事実がとても嬉しくて、自然と笑ってしまった自分がとても好きだ。

暫くすると、楽君と学園長は保健室を出て行く……楽君は何か怒っている雰囲気があるなあ。やっぱり、急に仲良くされると困るのかな？

二人が退出した後、私は自問自答を始めた。

「本当に……助けられるかな？」

私は何時も諦めないで来たでしょ、今回も諦めなかったら大丈夫だよ。

「楽君は迷惑じゃないかな？」

最初は当たりが強いかもしれないけど、すぐに慣れてくれると思う。

「どうやって救えばいいのかな？」

#獄炎——インフェルノ——#が言うには、今までの苦しみから解放してあげればいいんじゃないかな？例えば家族の温もりとかね。

そして、最後に私へ問い掛ける。

「私は楽君の何だったの？」

私は……く……く……だったよ。

「……そうなんだ」

そして、私は楽君を助ける事を固く決意した。

私の温もりを、楽君に……

あげるよ。

一章 嘘と真実 変化した朝と特別授業

一人だった朝、一人で居るはずの朝……なのに、俺の隣にはもう一人の姿があった。

「それでね、クラスメイトの梨亜ちゃんが〜」

俺が本を読んでいるというのに、ずっと話し掛けてくるのだ。俺の姿を見て、ちゃんと聞いているとも思っているのか？

学園への道を七割程進んだ所でようやく本を閉じ、藤宮へ話しかける。

「必要な時以外は近付くな、と、約束した筈なんだが？」

「そうだよ？」

そうだよ……だと？登校時間の何処に、必要な場面があると言うのだろうか。藤宮は分かっているまいだろうが、そこそこ注目を受けるような存在であるのだ。それに伴って、俺にも注目が移る事がとても耐え難い。

昨日の件もあり、負けたという事実は残っているわけで……俺を見る目は悪い意味で注目していた。

「頼むから……学校に関係する時間は、なるべく近寄らないでくれないか？」

「もしかして……迷惑、だった？」

まあ、そう帰ってくるよな。いつもの俺ならば少しだけ甘えてしまおうが、今は手駒である藤宮に対して甘える必要は要らないだろう。

「注目されるから迷惑だ。それ以外にも理由があるにしろ、約束の内容を守ってくれなければ……俺もそれ相応の対処をするぞ」

幾らでも脅せる素材があるんだ。材料を有効的に使って、藤宮を最低でも利用出来ればそれで良い。

学園長は藤宮に対して《契約》の対象外だと言った。だとすれば、俺がこいつに接する際に遠慮という気も排除していいのだろう。

「昨日、あの後学園長が言ってたけど、東雲楽に何かされたら私に言

え。って言ってたよ」

「……………」

学園長
あいつかあつ！

いや、待て。何か…の定義が言われてないとすれば、そうそう変な事をしなければ大丈夫、という事か。

しかし、学園長も手回しが速いようだな。俺と話した後には話をしに行っただろうが、俺がこうして藤宮に対する距離を置く事について、すぐに分かっていたという事になる。やはり侮れないな…………この学園での敵は、学年では無くて学園長ではないのか？

「学園長にそんな話をされたとしても、あまり俺に近付くな。登校なんて友達と行けばいいだろう？」

「え？私と楽君って友達でしょ」

「……………はあ」

駄目だ。こいつに期待するだけ駄目になるかもしれない。模擬試験をしている時のしつかりとした雰囲気は、藤宮涼葉の何処に行っただろうか？

ただ、気になる点は幾つか上がっていた。試合していた雰囲気が違うという点もそうだが、昨日の眼を使用した時…………明らかに知っていたようなタイミングだったからだ。

…………考えるよ聞いた方が早いかな？

「なあ」

「何？」

「昨日…………いや、何でもない」

藤宮は不思議そうに首を傾げて歩き始める。俺も歩き始めるが、学園に着く手前にある小道へと寄った。藤宮と一緒に教室へ着いてしまえば、変な噂が出回ってしまう可能性がある。気配^{ロブサイク}消失を使って、先に藤宮だけを教室へ行かせれば大丈夫だろう。

丁度よく草が生えて開けた場所に出た為、壁に寄り掛かって座り、鞆から本を取り出す。

「五分程あれば十分か」

俺が学校に行く時間はやや早く、授業開始の三十分前という事もあ

り、こういう時間で費やすとは思いもしなかったが、丁度良かった。
「何でここまで来たの？」

「それはお前を……」

ん？おかしいなあ……藤宮の音がするのは気のせいかな？

ゆつくりと左を向くと、予想していた声の主である藤宮涼葉が前屈みになって俺を見ていた。

「な、何でお前がここに居るんだ!？」

「え？何でって言われても、樂君がいきなり小道に行っただからでしょ」

おかしい、俺はしっかりと^{ロスサイン}気配消失を使っただぞ。^{ロスサイン}気配消失を

……使っ……た所で、眼を持っていてる人には効かないんだったな。俺とした事が、朝だから頭の回転が鈍っているのか。

「……お前は先に学校へ行け。お前も面倒な事になりたくないだろう？」

「面倒事は慣れてるから大丈夫だよ!」

俺は慣れてないから、というか、慣れたくないから大丈夫じゃないんだよ。つて、こうなつた藤宮に何を言っても無駄か。仕方ない、本を少し読んでから一緒に教室へ向かうか。

諦めてそのまま読書へと戻り、藤宮も俺の横へ座って本を覗いてくる。まるで犬のようだ……仲良くなつたでは無く、懐かれた様な感覚だな。

「暇なら、先に教室へ行つていいんだぞ？」

さらつと離れてもらうように促す……が。

「暇じゃないよ?」

駄目かあ。と言うか、明らかに……明のらかに暇そうだろ。何もせず俺の本を覗くことが暇ではないと言うなら、藤宮の暇はどういったものなんだ？本よりも興味が出る話題が出てきたのは初めてだぞ。

俺は十分程本を読み、藤宮は本を読んでいる俺を見ていた。そして、俺が立ち上がり歩き出すと藤宮も鞆を持ち、俺に続いて教室へと向かう……ドラ○ンク○ストか？

「……頼むから、教室に入る時は一人で入つてくれ。俺と藤宮が協力関係であると知られれば、問題が起こるかもしれないだろ?」

と、適当な理由を後に告げる事で藤宮を納得させる。ここまでしないと折れてくれないのか……今後の生活を危うくさせる問題だな。

藤宮は先に教室に入り、俺は五分遅れで教室へと入った……が、やはり注目される事に違いは無い。チラホラと「負け」という言葉が耳へ入って来る。よし、登校の事については言われていないようだな……試合の事は俺自身で行なった事なので、どんな噂が立とうが問題ない。

クラスからすれば、いけ好かない男子を人気者が倒した……という噂だろうが、俺にとっては丁度良い内容だ。これによつて藤宮の株は一気に上がり、かなりの情報が行き交う場所へと位置する筈である。となれば、かなりの利用価値を見出せる……

が、保険は掛けておこう。

「すぐに人を信用する程、俺は人間出来てないからな」

学園長は俺をどうしたいのかは分からないが、今までの出来事を知っているのならば、俺がこういう対処をしてしまう事ぐらい先読みして欲しいものだ。

なんて事を考えてから十分後、本を読んでSHRまで待っていると、クラス担任である浮島先生が入って来た。出欠を取り、連絡を話し終えた頃……先生は忘れていた事を思い出し、とても重要な事を話し始めた。

「そう言えば……一週間後に一回目の特別授業があるから、準備する様にとの事らしいです。詳細はまた今度話すからね」

特別授業という言葉に、クラスメイトたちは騒めき出す。初めてのポイント取得イベントはテストではなく、この特別授業になりそうだ。

面倒な内容じゃなかったら何でもいい。

俺がやる事はただ一つ……苦することなく、楽をして勝つ事だ。

特別授業は嘘の香り

浮島先生が特別授業予告をしてから三日後。

学年全体の話題は、やはり特別授業がメインとなっていた。いつ説明されるのか？どんな特別授業をするのか？と言った話題が、この三日間で途絶えること無く行き交っていたのだ。

そしてようやく、終礼時に浮島先生は特別授業について話し始める。

「君たちの一回目に行く特別授業は〜！」

ドゥルルルルと口で、発表時に聞く効果音を出してから宣言した。

「……嘘と真実です！」

クラスメイトたちはザワザワとし始め、憶測が行き交う。題名を聞いただけでは想像がつかないな……分かる事と言えば、騙し合いの様な感じだろうか？

そして、対象はクラスメイト同士になる筈だ。だとすれば……ポイントに差をつける為の特別授業になるという事か？と、予想するのもいいが、実際の内容を聞かなければ思考損というものだ。

周囲の騒めきが収まると同時に、浮島先生は嘘と真実についての詳細を話す。

「これは一対一で行われる、言わば心理戦の様なものかな。相手に嘘か真実かを見分けさせ、そして騙す。とても簡単な特別授業になっているね」

とても簡単な……この言葉が説明としての簡単なのか、それとも……もしそうならば、この時点で特別授業が始まっているという事になるから除外だな。ただ、次の説明次第では準備行動がガラリと変わってくるかもしれない。

「ざっくりとした説明なんだけど、ターン制で行われるトーク型心理戦になっていて、自分のターンになれば相手の質問を受けてそれに答える。そして、答えた内容が嘘なのか真実なのかを見分けて答える、という内容になっています！」

なるほど、大体は掴めたな。その嘘か真実かを見分けて、その正誤

でポイントの移動が起きるわけか。だが、一発目の特別授業というイベントで、こんな疑心暗鬼になるような事をして良いのか？

……あの学園長がならばやりそうだな。しかし、何も考え無しにこんな、クラスを分裂させるような事をするというわけでもあるまい。もし、本当に分裂させるならば時期を考えるはずだからな。

と、大凡の考えが終了したところで、先生が補足を入れる。

「準備期間は、今日から本番までの一週間と少しだからね。これで分かったと思うけど、別に無理な対戦を強いる訳では無いんだよ……ルールに準じていれば、何をしても大丈夫！……以上かな、それじゃあ解散〜」

これか……分裂をさせない手が隠れているルールは、ここにあるのか。ルール上ならば何をしてもいいという、ルール上のルール、つてやつだな。どのゲームでもルールは定められているが、それでも行動するのには行う手が殆ど無いのである。

例えばジャンケンでは、グー・チョキ・パーと決まった形で決まった勝負があるけれど、それがルールとして、そのルールに準じていれば何をしてもいいと言われた所で、相手の指を全て切り落とす他、結局は他にすることは何も無いだろう。

だが、このルール上のルールならば、行う手が幾つも出てくるのだ。そういったシステムを考えたのが学園長ならば、あの人はこの先の特別授業も、かなり高度の心理戦になる可能性が非常に高いだろうな。

「……楽君」

俺の背後から小さな声が聞こえてきた。チラリと見れば、窓の外を眺めている藤宮の姿があり、向こうもチラツと俺を見る。俺と話している事を避けている辺り、朝の藤宮とは違う雰囲気を感じ取った。

「嘘と真実……どう思うかな？」

「どう思う、とは？」

まあ、こいつが何を言うのかは大体予想がつく。

「全員がプラスで……」

「無理だな」

その愚かな考えをバツサリと切り捨てる。別に意地悪で切り捨て

た訳では無く、そんな事は不可能なのだ……ある一種の解決策を除けばだが。

不可能を可能にする事は出来ないのである。新聞等でそう言った見出しが偶にあるのだが、不可能を可能にしたのではなく、可能だった事を単に成し遂げた、それだけの事なのだ。不可能は文字通りポツシブルでは無く、インポツシブルなだけの話である。この事実は覆らない。だから……

「……お前の望む展開ではないかもしれないが、クラスが平等で終わる方法は……少なからず存在する」

「本当に!？」

食いつくか、こういう所は朝の藤宮を見ているようだな。

「だが、それはお前の動き次第だな」

「え、私?」

「……ああ」

準備期間から特別授業当日まで、こいつがしっかりと行動すれば可能な内容だ。そう、俺と藤宮がする事は、可能性がある作戦を成し遂げるだけに過ぎない。もし出来なかったなら、この作戦は不可能だったってだけだ。

と、勝手に話を展開する前に思考を一旦捨て置き、藤宮に一言だけ残しておく……この一言が準備開始の合図にもなる。

「お前が望むなら、クラスを一つに……しないとな」

俺は立ち上がって教室から出て行った。クラス内では、準備について作戦会議のようなものが始まっており、誰も帰らずに話していたが、俺が教室を出たことにより少しだけ注目を引いたようだ。

俺の予想通りならこのままもう一組、俺と同じ様に教室を出ようとする奴らがいるだろう。そして……

「~~~~~」

教室から少し大きめの、少し怒りに近い声が上がった。これで、準備が始まったな。

俺は帰宅する前に、屋上へと足を向けた。

準備期間① 契約開始

屋上は静寂に満ちていた。恐らく、一〜三学年全体に特別授業の説明の後、作戦会議をしているクラスが殆どだからだろうか？

しかし、静寂の中に一人だけ煙草を蒸す人物が居た。こちらを振り向くこと無く、話し掛けてくる。

「東雲楽、数日間藤宮涼葉と一緒に居てどうだった？」

どうだった……か。そう聞かれると、答えに困るな。学園長が聞いている内容が藤宮への利用価値に対してなのか、それとも仲良く接して、の部分なのか。

俺は前者だと予想して答える。

「まだ数日しか経っていないので……今回の特別授業で見出しますよ」

「……そうか」

少し間があったな、後者について聞いて聞いていたのか。もしそうならば、藤宮に対して不満の声が上がらないだろう。ただ、人間というのは不満な事でも慣れてしまう。この数日で、ある程度のスルースキルは習得していたのだ。

どんなにウザいと感じても、時間が経てば感じ方が少しずつ変わっている感じがした。駄目だ、このままだと学園長が言っていた通りに、藤宮の見方が変わってしまうかもしれない……。意識を変える必要がありそうだな。

「今回の特別授業だが、お前はどうか感じた？」

「非常に興味深い内容だと思います」

「そうか……お前のクラスはどう進むと予想する？」

破滅の道か協力の道か……もう一つの道か。誰もが望む道は協力だろうが、俺はもう一つの道を進みたいものだ。藤宮を上手く誘導出来れば、自ずと進んでくれる様になる筈なのだが、藤宮はまだまだ弱い。一手を間違えば破滅へ進む事になる……。

「俺が藤宮を育てれば、俺の望む道へ行ってくれてくれるでしょうね。ただ、今回の特別授業はチュートリアルみたいなものなので、そこまで期待

しなくても良いですよ」

学園長は興味深そうに笑い、重荷を乗せる言葉を放つ。

「君にとつてこれが初戦だ。面白い、と私に思わせる様な戦いをして欲しいんだが？」

「難しい要求をして来ますね」

別に、やれと言われたなら出来ないことは無いが、面倒くさいという感情が八割を占めるこの思考を除かなくては、やれと言われようと、やる気は起きないだろう。

俺をやる気にさせる一言があるならば、少しだけ方針を変えることを検討しても良い。

「他に、何かないですか？」

「……ふっ。それじゃあ、私に面白いと思わせられなかったら、お前のポイントは学年最下位からのスタートとしようか」

想像の数十倍の宣言をされた。

「リターンは？」

「そうだな、ルール違反による罰を無効にしてやろう」

なるほど……これで方針が定まった。俺が望む道を進み、且つ楽をして学園長との約束を守る方法が決まったのだ。準備段階で、少しだけ手を加える必要があるけれど、それが終われば特別授業を難なく過ぎせる他、今後の行動について近道を通る事が出来るような細工も作れる。

学園長との約束はハイリスクミドルリターンだが、その後の行動に關してはローリスクハイリターンだ。更に、ローと言つてもリスクを受けるのは俺ではないから、ヘマを踏んだ所で罰を受ける心配が無い。

脳内思考では、今後の行動について次第に順序が組み立てられ、藤宮が今後行うであろう行動も粗方、予測し終わった。

「もう決まったようだな？」

「はい」

「特別授業本番を、期待しているよ」

「期待を裏切る事は無いと思いますが、いざと言う時の責任は……そ

「ちらが取って下さいね」

いざと言うのは、はつきり言うとは藤宮涼葉の事である。学園長も理解したのか、ふふつと笑って煙草を短く吐いた。この無言が返事と受け取り、俺は用事の無くなった屋上を後にする。

しかし、学園長は短く一言だけ告げた。

「嘘と真実は八回だ」

一瞬だけ理解に悩み、納得出来ないまま錆びた音のするドアを閉めた。次に向かう場所は……と言ってもショッピングモールだとか裏路地という場所ではなく、何も無い様な雰囲気を出しながら、俺を見る視線と一緒に寮へと向かった。

俺を見る視線と言っても、遠隔で監視されている訳ではなく、俺の近くに存在しながら見続けられている感覚である。簡単に言えば、俺の背後を透明化のギフトを使用して、屋上に行く前からついて来ているという事だ。

しかし……視線は察知できるが、反透明化のギフトを展開しても全く通じる気がしない。S級を設定すれば可能だろうが、A級でも不可能となるとかなりの強者だな……利用価値は十分にある

まあ、誰なのかは大体分かっているが……俺も相手も都合の良い場所です話したい。

暫くの間、寮への道を歩いて行く。視線の主も疑うこと無く俺を追い、寮に着く前に道を外れた。

「……契約をしよう」

「……」

まだ気付いて無いとでも思っているのか？

「お前の望みは入学式の時点で分かっている。透明化を消す気にはならないのか？」

「……」

警戒をしているのか、この煽りをしてもすぐに出ようとはしないらしい。かなり慎重な行動の仕方だ……隠密行動をする際には絶対に必要な考えである。だが、俺との話で慎重にさせる必要は無いからな、早速芯の部分に触れていこうか。

「俺は、お前の希望を実現出来る唯一の存在だ。命を捨てる覚悟があるのならば、俺の前に姿を表せ。」

「……その言葉は、私の命と引き換えに……という事ですか？」

目の前にゆっくりと姿を現したのは、入学式にて俺を殺そうとしていた深町一花であった。

「お前を殺して願いを叶える……理には叶っているな。そっちの方が良いのか？」

「別の方法があるのですか？」

やはり乗ってきた、心理に効果的な交渉の仕方である。深町は自らの死と引き換えにする程、叶えたい希望があったのだ。そして、そんな考えをする利用価値のある人物と取引をするならば……。

「命は俺が取るのではない。誰かによつて取られるかもしれないが、取られないかもしれない。全ては、お前の技量次第だ」

深町の目が鋭くなった。条件が低くなった事について、数個の疑問を覚えたのだろう。取引についてはまだまだ、と言った所か。

「詳細には何をすればいいのでしょうか？」

「ある時は情報収集と提供を、ある時は尾行と対象との戦闘と言った感じだ……不服か？」

「……いえ、貴方の様な方からそのような条件を提示して下さいとは思いませんでした」

やはり、俺の事を少しは知っているようだ。入学式の時から俺をターゲットに動いていた、という事になる。そうでもしないと、実技場での記憶を改竄したが運良く残っていた、だけでは当然納得出来なかつたからな。

「俺からの指示に従えば望みを叶えてやろう。但し、不出来な結果や報告があれば、契約はすぐに切らせてもらおう」

「…分かりました。私は貴方との取引を承諾し、契約を結びます。私は貴方の期待に添えるよう、精一杯務めさせていただきます」

深町一花の性格が穏やかで良かった。お陰様で戦闘をすることも無く、ほぼ一方的な契約をすることが出来た。

深町本人は生徒会に入る予定だったので、情報の入手手段として

は、生徒内の最高権限を得た中で行えるとの事らしい。やはり深町は、利用価値が大いにある人物だったようだ。今日を選んで正解だったな。

「俺を見ていたという事は、学園長との会話もしっかりと聞いていたか？」

「個人的な話であることは理解していましたが、尾行していたので仕方なく聞いてしまいました」

「学園長が今回の特別授業について、一言だけヒントを言っていただろう？それはお前への前金のような形でくれてやる」

「ありがとうございます」

深町は礼をして、学園長の一言をしっかりと前金である事を理解した。

「そして今夜、お前の望むギフトを使用する場面が出てくるだろう。お前に与える一つ目の任務だ……そこで、証明してやる」

「……分かりました。私も期待していますね」

俺と深町は少しだけ情報を共有し、この場は解散となった。

一方その頃、藤宮は……。

準備期間② 天然少女の危機、再び

楽君が教室を出た後、教室の話題は楽君へと向いた。殆どが悪口ばかりで、少し嫌な気持ちになってしまう。そんな事ないよ、って言いたかったけれど、楽君との約束を破ってしまう事になるから駄目だ。そして、もう一度教室のドアが開く音がして皆が振り返る。誰かが入って来た訳ではなく、クラスメイトの男子生徒四人が教室を出て行った。私はその四人を知っていた……入学式当日に私を襲おうとした四人だ。

私は自然と四人を追って、すぐに声を掛ける。

「何で……帰っちゃうの？」

「…逆に、どうして俺達も協力しないといけないんだ？」

言葉が出て来ない。説得する言葉選びに、とっさの思考が追い付かなかった。

「き、協力すれば…皆がプラスで終われるかも！」

思い付いた言葉は、説得には足りないかと私自身分かっている。でも楽君が、私の行動で結果が変わるって言うなら、何とかして皆を協力させないと！

男子生徒四人……えっと、近藤君だったかな？恐らく、私の話について考えてくれているのだろう。

しかし、返事は私が望むものでは無かった。

「この前の続きにに応じてくれるなら、考えなくも無いなあ〜」

近藤君たちは下衆な笑を浮かべて、少し怯えた私を見る。この前：裏路地での続きに応じれば、協力してくれるって事……。ただ、今回は助けが入らない事は分かる。事前に楽君へ報告して……いや、楽君には迷惑掛けたくない。

そんな事を考えていると、私のギフトである眼が起動した。

「……分かった。その提案に乗るよ」

本当ならば乗るべきでは無い取引、という事は分かっていた。しかし、今乗らなければ何か失敗するという気がして、私はこの取引に

乗ってしまった。

楽君ならどうするのかな？この一手は正解だったと信じたい。自らの体を犠牲にして、結局は骨折り損だったとしたら……私は自分自身を嫌いになるかもしれない。でも、楽君が褒めてくれるなら、まだ私を許せる。

近藤君から指定する場所と時刻を聞き、伝え終わると四人はすぐに帰って行った。

怖いけど……大丈夫。そう思いながら、私はクラスでの作戦会議の後に寮へと帰り、指定された時刻まで待った。

―夜―

指定された時刻の数分前に部屋を出て、前回の裏路地にある小さな倉庫へと向かって行った。移動中は周りの目に警戒する為に眼を使っていたが、寮を出てから何者かに見られているような感覚があったのだ。しかし、視線のある方へと向いても誰も居ない。

「？」

男子生徒四人の中に、透明化のようなギフトを持っているという事？それでもおかしい……彼らのギフトは、B級以上の結果を残していなかったはず。私はA級以下のギフトなら、透明化をされた所で気付ける……という事は別人？

道中、この後起こる事を気にする事もなく、視線についての疑問が脳内を駆け巡る。そして、裏路地に着いた頃によく、恐怖の感情が浮かび上がった。

背後の視線は……まだ私を追っている、という事は倉庫内までも入ってくるって事？

「分からないよ」

背後の視線以外の視線を確認してから、ゆつくりと裏路地へ入って行く。前回の場所を通り過ぎ、細い曲がり角を曲がると……そこには、半開きになっているドアがあった。恐怖を感じて手が震えていたが、眼を使用する事によって震えは次第に軽減され、半開きだったドアをゆつくりと開けた。

中には小さな倉庫になっており、何かしら部品が詰められている箱が幾つも置いてある。その場所に四人が会話をして待っていたのだ。「本当に来たんだなあ、ビビって来ないかと思っただぜ。まあ、来なかったら来なかったで、それ相応の事をしようかって話してた所だ」

「……」

これから何をされるのか、私は分かっていた。分かっているもやっぱり怖いよ。本当は……こんな選択をして、とても後悔してる。こんな場所じゃあ大きく叫んでも、助けは来ないよね。

私は手を体を守るように抱える。四人は私の四方を囲んで、下卑た笑を浮かべていた。私を囲んだ際に、後ろに回った一人によって鍵を掛けられ、事を終えるまで逃げられないようになった。

「抵抗するなよ？まあ、ここまで来てしまったら抵抗出来ないと思うがなあ。もつと楽しもうぜえ」

「!?」

横に居た二人が私の手を掴み、無理矢理に手を除けさせ、正面の近藤君によつて順番に脱がされていく。

「だつ、ダメっ!」

「今更怖くなったのか?もう遅いんだよ!全員が協力して欲しいってだけで、体を使わせるとか……馬鹿だよなあ!」

抵抗しても、女子一人の力が男子二人に敵うわけもなく、制服のボタンを外され、チラリとブラジャーの一部が見えている状態だった。

やっぱり……楽君の言う通り、私は愚かだったのかもしれない。こんな事で後悔するなら、最初から全員が協力をする事を望まなければ……私の行動は、不正解だったって事かな。自分が望んだ事に自分を壊されていく感覚だった。

私が気を正した時にはもう、ボタンは全て外されてブラジャーが完全に見えている状態。近藤君の手は、段々と私の胸へと近付いていた。

「っ!」

決めたくのない覚悟を決め、ギョツと目を瞑った次の瞬間……近藤君の手の感触は感じなかった。そして、触れられる感覚ではなく、叫

び声が返ってきた。

「指があ、ゆびいがあ！ゆびがないいいいい！血があああああああああ!!」

「おい！どうしたんだよ！」

私は怖くて目を開けられない。横に居る二人が近藤君に近付いて行った事は分かり、その二人も絶句しているようだ。

「お、おい。逃げた方が良いんじゃないか!？」

「こつ、近藤を置いて行くのか！」

「俺達も……俺達も、こうなるかもしれないんだぞ！」

状況を把握したい為、目をゆつくりと開けようとすると……誰かの手が目を覆い、もう片方の手で制服のボタンを留めて、そのまま背後から抱き締めてくれた。胸の感触があるから女性？

「藤宮涼葉、貴方は今の状況を見ない方が身のためです。私と彼が終わらせますので、私の手の内でゆつくりと心を鎮めて下さい」

後ろに居る人は誰？助けに来てくれたという事は理解出来るが、声を聞いて人物の特定が出来ない。私と彼……もしかして、彼つて楽君の事？

ゆつくりと呼吸を整え、私を抱き締めてくれる人に、少しだけ体重を掛けさせてもらった。そして、私の周りから再び叫び声上がる。

「いだアアアアああああい！指があ、俺の指がつ！」

「おれはああつ！なにもしないでないじゃないがアアアアああ！」

安心出来るけど、怖い。目の前で起こっている事が想像出来て、とても怖い。

「指が全部切れたぐらいでガタガタ言うんじゃないやねえ、手を切られるよリマシだろう。俺の手を煩わせるな新しい手駒共」

「お、お前がア！どうしてえええ、助けに……来たんだよおお！」

少し間を置いて、女性の言う彼は答えを返す。

「俺はただ、夜に散歩して自分の身を勝手に売る駒を回収しに来ただけだ。そうして来たら、お前らが俺の駒を虐めようとしたんだろ？」

「この声はやっぱり……」

「東雲ええ！今度お、覚えてろよオオオオおお！」

「今度なんて無いな。お前らには一度躰が必要な様だ、後でしてやるから今は少し眠ってろ」

そして、彼らから発する怒号は次第に鳴り止み、この場に静寂が生まれる。

腰に巻かれていた手が外れ、目を覆っていた手も離れて行く。暗闇から急に光が入った事による眩みが、この場の空気感が変わったことを示している気がした。

状況を確認しようと、目が慣れてきた事を確認してゆっくりと正面を向く……そこには、この場に来るとは思っても見なかった楽君の姿があったのだ。

「……もう片付けた」

「私がここに来るって……分かってたの？」

「ああ。俺が唆した部分もあるからな、その分の責任は取ったつもりだ」

楽君の態度はいつもと変わらない。ただ、行動はいつもより優しくかった気がする。

「私が取った選択肢は、正解だったのかな？私は楽君の言っていた通りに動けたのかな？」

「……正解だ。俺の想定通りに動いてくれた」

「ふふつ、良、かつ……た……よ……」

身体的にも精神的にも疲れていた私は、楽君の言葉に安心したのか……その場で意識がシャットダウンした。

だが、意識が切れる数秒前……楽君は少しだけ私に話し掛けていた。「俺がお前を使うとしたら、こんな方法ばかりだ。もしも嫌ならば、離れてもいいからな」